家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

8

お茶の水女子大学
昭和
60. 9. 4
受贈
附属図書館

第八十四巻　第八号　日本幼稚園協会

子どもの遊び

（全6巻）

●全国学校図書館協議会選定図書●

0歳から三歳

（3巻セット）土屋多喜栄 丸尾ひさ
本吉圓子 田中文子 著

三歳から六歳

（3巻セット）本吉圓子 前典子
笠間典美 田中文子 矢作邦子 著

0歳から6歳までの発達に応じた基本的な遊びをすてきなイラスト入りで紹介。

ワンくん こんにちは

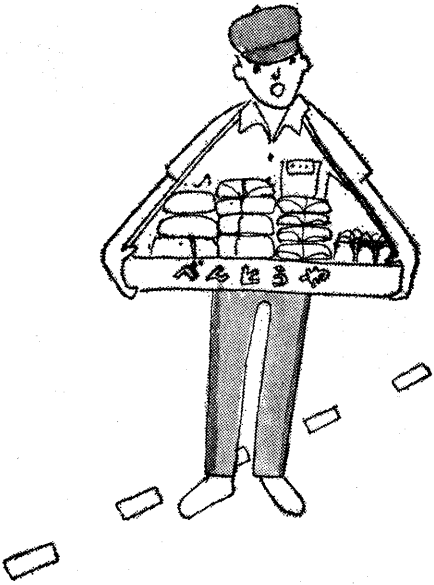
この本に収録した遊びは、0歳から6歳までの子どもの成長過程において、だれでもが大好きで、必ずといってよいほど通過する遊びです。
また、これだけはぜひ経験させたい遊びを現場の体験を生かした保育者の目でまとめたものです。
遊びの中で何が育っているか、保育者はどんなかかわり方をすればよいか、どうしたらその遊びがさらに楽しくなるかなどについて考え直すヒントがたくさんもり込まれています。

セットケース入り・セット定価 各3,300円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育



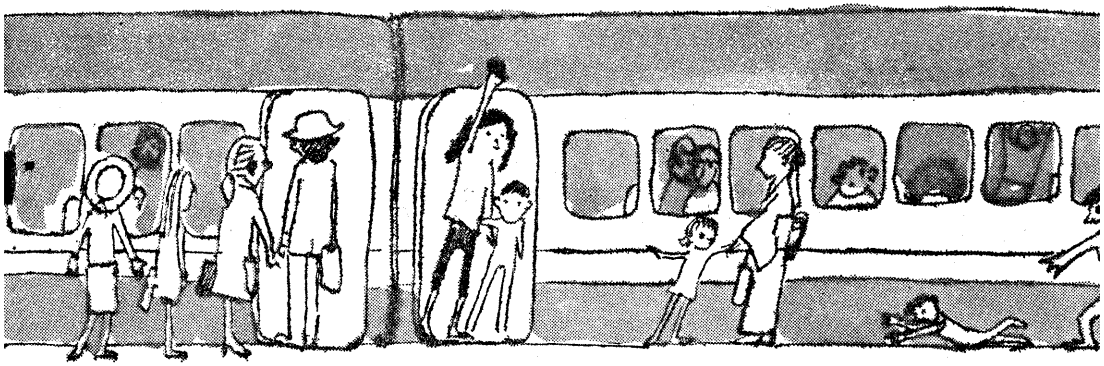
第八十四巻　第八号

幼児の教育　目次

——第八十四巻　第八号——

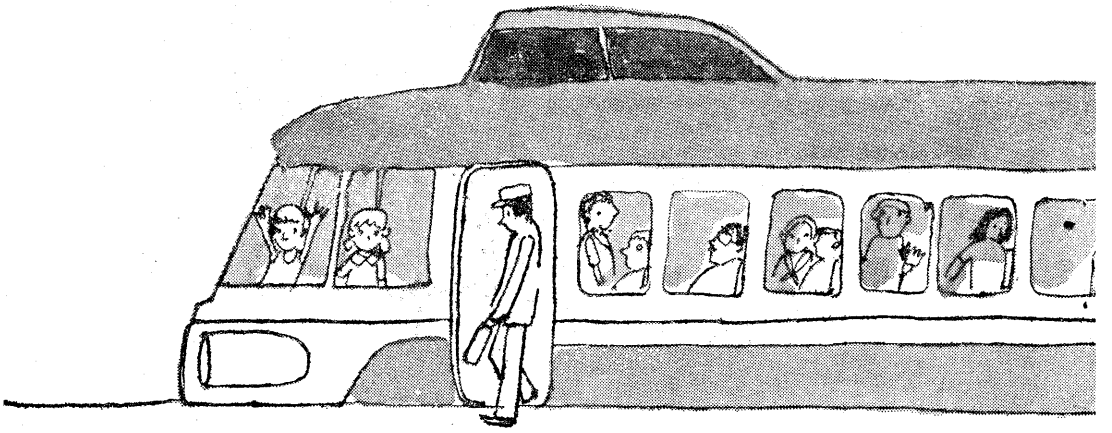
《特集・緑蔭図書紹介》……中村　弓子…（4）
入江　礼子…（10）
豊田　一秀…（14）
近藤伊津子…（17）
中村　悦子…（22）
村石　京子…（28）
養護学校の日々……津守　真…（33）

© 1985
日本幼稚園協会



兎園随筆⑫
――「桜」そして――……蕪木　寿江…(37)
SF的読み解き　子どもという風景
第六回　開らかれた地平……堀内　守…(40)
子どもたちのこと……大橋利恵子…(49)
教育実習ノート……(52)
若いおかあさんたちへ……宮里　暁美…(56)

表紙絵・『ヨーロッパのきりがみと影絵』(岩崎美術社刊)より
カット・福田理恵



大江健三郎著

『新しい人よ眼ざめよ』

（講談社）

中村　弓子

本書は昨年度の大佛次郎賞を受賞した話題作であるが、著者みずからが、この作品の動機を次のように説明している。

「障害を持つ長男との共生と、ブレイクの詩を読むことで喚起される思いをないあわせて、僕は一連の短篇を書いてきた。この六月の誕生日で二十歳になる息子に向け

て、われわれの、妻と弟妹とを加えてわれわれの、これまでの日々と明日への、総体を展望することに動機はあった。」こうした動機をもって書かれた本書はまた同時に、障害児「イーヨー」をめぐる状況を通しての過去二十年間の日本の思想的状況の回顧ともなっている。

しかし著者はイーヨーとの共生の意味を読み取るために、なぜブレイクの予言詩（プロフェシー）に訴えることになったのだろうか？　それは障害児の存在が、人間とは何かという根本的問いを絶えず投げかけずにはいないからであり、またブレイクの言葉にあるように、真の「無垢（イノセンス）（無知ではなく）は、知恵とともに住んでいる」からである。それゆえにイーヨーの行動、言葉のひとつひとつが一種の象徴的意味合いを持ってくる。本書でイーヨーの言葉がすべてゴシックで書かれているのは単なる偶然ではない。その象徴的意味合いを著者はひとつひとつブレークに訴えて解き明かそうとしている。その試みの注意深さ、丁寧さの中に、著者の父親としての愛情が溢れ出ている。

イーヨーとの共生の意味の読み取りは、複雑なひとつの体系を構成しているのであるが、その核心をなすものは次のこの上なく美しいエピソードの中に開示されている。

長野のある養護学校がクリスマス会に上演する劇の台本を著者に、その中の歌の作曲をイーヨーに依頼してきた。（イーヨーは作曲に天与の才能を示したのである。）著者はガリバー物語のパロディーを考え、小さな人たちの二つの国のどちらの権力者の言うことにも左右されずに、小さな人たちの味方として、戦争の道具となることを拒否するガリバーの中に、小さな人＝障害児の生きてゆける社会を守る政治のイメージを托した。そしてイーヨーはその歌を作曲し、上演日にはプロンプターとしてガリバーの大きな足のはりぼての中に入っていた。すべてが終り、担当の先生が「作曲者を紹介します。さあ出て来て下さい」と言うと、イーヨーは意外にも「僕は足のなかにいようと思います。ありがとうございました！」と答え、足の中に入ったまま「きよし、この夜」を父兄もいっしょに歌うことを提案する。大きな拍手の

中、はりぼての裏側からあてられた照明の中に、手を振って歌い続けるイーヨーの影法師が浮び上る……。

そのイーヨーの姿は著者の目にブレイクの予言詩「ミルトン」の中の、人間の救済の実現のために天から地上に降ったミルトンの霊がブレイクの肉体に入りこむ、その箇所と重なって見えてくる。「私は見た、天頂から落ちる星のように垂直にくだってくる、つばめのようにあるいはあまつばめのように素早く／そして私の足の跗骨(あし)のところに降りそこから入りこんだ。」ガリバーの足のはりぼてを、イーヨーが「立派な足ですね！　これはパパの足でしょうか？」と言っていたこともあり、はりぼての足に入ったままのイーヨーの姿は、ブレイクの予言詩を媒介に、著者にとって本質的にイーヨーが何者であるかを開示することになった。イーヨーはいわば「彼岸からの使者」なのである。それはまたイーヨーにとっての著者が何者であるかをも開示することにもなった。「これは父親のためのイーヨーによる定義だ」と感じながら、はりぼての足の中のイーヨーに著者は拍手を送る。家族全員が協力した劇の成功のその喜びの高揚の中でのこの啓示は読む者に深い感動を与える。

「定義」、それは存在の本質的なアイデンティティを表現することであり、はりぼての足の中に入ったままのイーヨーは、その姿そのものによってこの上ない自分の「定義」をし、そしてその自分に対する父親の「定義」づけをも果したのだった。著者は、イーヨーのような障害児たちが生きてゆくのを助けるために、このようなできるだけ具体的な形の「定義」を世界、社会、人間に関してしてやりたいと考えた。それが本書を書くもう一つの動機となっている。

著者はある講演の中で次のように言っている。「障害児学級の息子の同級生たちのために、そのような子供たちが将来この世界で生きてゆくためのハンドブックというものを書きたいと私は考えるようになりました。そのような障害児学級の子供に理解できる言葉で、この世界、社会、人間とはどういうものかをつたえ、それでは元気を出してこれらの点に気をつけて生きていってく

れ、といいたいと考えたのです。」このような世界の定義の試みは、また作家としての著者に、自分自身を洗い直し、まずは自分自身に切実な要素となっている定義がどのような経験を介して自分のものとなったかを問い直すことを促す。そのような原体験の洗い直しの試みはこの本の中でもなされ、それは「作家」大江健三郎の試みとして非常に新鮮な密度を持った部分になりえている。そのような「作家」としての定義の試みが、イーヨーたちのためのハンドブックに用いられる定義となるにはまだまだ大きな距離があるようには思われるが、しかしイーヨーの存在こそが著者にそのような一歩を踏み出させたのは確かなことであるし、それがいつの日かハンドブックの定義へと連なっていくことを希望することもできるのだ。

そもそも障害児たちが生きてゆくためのハンドブックとしての定義集という著者の着想の出発点にあったのは憲法だった。社会はいかなるものでなければならないかという定義集であり、またそれはイーヨーのような人間が安心して生きてゆける社会の定義でなければならない。その定義集は本来ならば、戦後まもなくの憲法の出現に少年時の著者が受けた強い感動を反映して、ちょうどブレイクが独立宣言の思想を予言詩「アメリカ」で歌ったように歌い上げるものだったかもしれない。しかし「当の憲法下の現実そのものが簡潔、正確かつ喚起的な言葉で書くことを不可能たらしめている。」そしてそこにイーヨーの育った二十年間の日本の右翼から左翼に至る思想的状況が厳として存在している。特に核兵器の状況をめぐって著者は、「個としての暴力・情念のゆきつくところを身にしみて知る人間が、世界規模の暴力・情念の暴発に対して抗議しよう」とするそのような取り組み方に共感を示しつつ、核の時代におけるイーヨーとその弟のような新しい世代の人間が、自分の置かれた場の「傭兵」となってしまっている人間たち、「永久に知の戦いを抑圧して、肉の戦いを永びかしめる者」である「傭兵たち」に対抗して生きてゆくことを祈願しつつこの本を終えている。

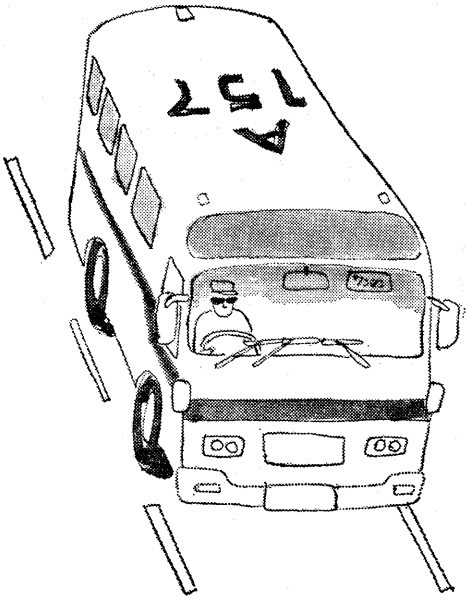
さて、「同時代の政治問題、国際問題をモチーフとしながらも、固有の神話世界をくぐりぬけさせて、時をこえた表現とした」ブレークにならい、この本の最終部分の核の新時代に眼ざめるべき「新しい人」のイメージには、ブレークの詩「ジェルサレム」のキリストとアルビオンの対話の中に展開する死と復活のテーマが重ねられている。それは著者とイーヨーという個人の死と復活でもあり、より大きなスケールでは綿綿と続く人類の死と復活といういわば終末論的ヴィジョンをも意味するのであろう。そしてキリスト教において死と復活が、キリストによる「罪のゆるし」によってはじめて成熟するものであるように、著者も、核の状況と根本においてつながるような個の規模での暴力、情念が自分の中にうごめいているのを不安をもって見定め、「まだ無垢の力をもちこたえている」イーヨーの中にもその前兆が表われつつあるのを恐れながら、しかし両者の共生の究極に、死と復活に伴う「罪のゆるし」の恩寵のようなものがあるのを感じる、という。しかし、そもそもイーヨーとの共生の意味を読み取るために終始著者が訴えているのはブレークにおける神そのものではなく、その神から派生する宇宙論的な力をあらわす神人たちの神話的世界である。そのような世界における恩寵の予感はいったいどこへつながっていくものだろうか。そしてそれは核時代の現実世界においてどのように働くものなのだろうか。この点は本書において興味深い未知数の要素として残っている。

さて最後につけ加えるならば、この本の構造は一昨年同じこの緑蔭図書紹介で取り上げたトゥルニエの『フライデーあるいは太平洋の冥界』と非常に似ていることに気がつく。大江氏にとってのイーヨーはいわばロビンソン・クルーソーにとってのフライデーであり、その出会いを通じてロビンソンが認識というものの見直しをしていったように、大江氏も自分にとっての「定義」をし直してゆく。その見直しのとき参照したのはロビンソンにとっては聖書だったが、それは大江氏にとってはブレイクである。大江氏自身がこのトゥルニエの本を「野生の

思考」についての小説として推薦しているが、自身のブレーク＝イーヨー経験との深い類縁を感じて惹きつけられたところも大きかったはずである。しかし文明の思考と野性の思考を対比した『フライデー』と比べてこの本はより形而上的であると同時により社会的でもある。そして何よりも大江氏のイーヨーに対するまなざしの親しさ、暖かさはフライデーに対するロビンソンのまなざしとは比較にならない。

さて、本書を読んだあとに、非常に抒情的な筆致ながら本書と通うものを持つもう一冊の本、国木田独歩『春の鳥』を読んでみたらどうだろうか。ここに登場する「六さん」ももう一人の「彼岸からの使者」である。そして春の鳥とひとつになって天守閣から飛ぶ「六さん」には、死の時がいたった際に、魂が首尾よく肉体から脱け出していけるように、坂道でグライダー滑空のように地面を走っては空中に飛びあがる「魂の離陸」の練習をした大江少年の姿とも重なってくるのである。

（お茶の水女子大学）



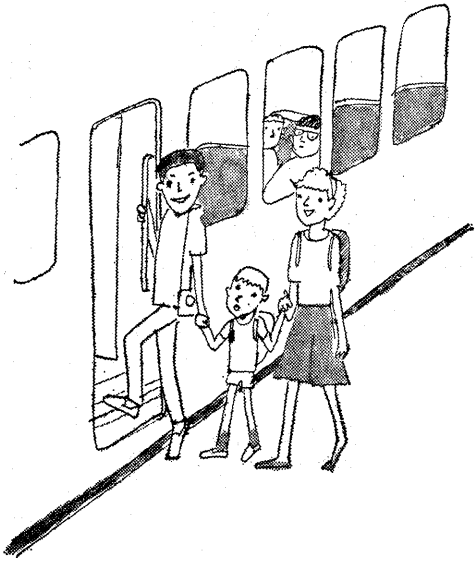
津守　房江著

『育てるものの目』

（婦人之友社）

入江　礼子

「なんだか、とてもホッとしたわ。」私はこの「育てるものの目」の最終ページを閉じた時、思わずこのような言葉が口を衝いて出てきた。世に育児書が無数にあり、かつ、育児に関する情報が氾濫する今、果たして母親自身がそれを読んだり聞いたりして、心から安心し、二十四時間絶えることなく続く子育てにむかう「力」を与えてくれるものがどれだけあるだろうか。むしろ母親自身を不安に陥れ、その心に残すものが焦燥だけであるというものの何と多いことか。もちろん育児書の著者達は母親の不安を救う目的で書いている方が大半であると思う。



しかしその意に反して、母親は逆に、不安や焦燥に陥るのである。著者の肩書を見ると、心理学者、医者、教育者であることが、これまた圧倒的に多い。そういう権威があるゆえに、育児書通りの発達をしない我が子を眼前にして、母親は罪悪感すら抱きつつ子育ての迷路に陥る。核家族化が進み、その上近隣との密度の濃いふれあいが希薄になっている現代では、母親は、特に第一子を育てている時、育児書に頼らざるを得ない面もある。そういう時、それらの育児書と違ってこの「育てるものの目」は、育てている人に安心感と力を与えてくれるように思うのである。

この本の特徴は、まず著者その人にある。著者は、一男三女の四人のお子さんを育てられた母親である。母親自らが書き手となって今、育児のただ中にある母親に話しかけている。書く側も読む側と同じ立場であり対等である。いつも書く側から「教え諭される」立場にあった読み手である母親は、その受け手の立場から解放され、読みながら、自らの日々のことをあれこれ思いめぐらせることが出来る。読み進みながら、自身の子どもと共にある生活がオーバーラップするといえばよいだろうか。或る箇所を読みつつ、心の中には昨日のあれこれが浮かんでくる。読みつつそのことをもう一度生き直すことが出来るのである。書いてあることが、単なる知識ではない深い体験から来るものであるがゆえに、それによって呼びさまされる読み手の記憶の内容がより鮮明になり、今迄気付かなかった記憶の裏に隠れたそのことの意味の一端が明瞭になっていくのである。「あっ、そうだったのか。そういうふうにも考えられるんだわ。」こう思った瞬間、今迄袋小路としか思えなかったことに、道を見出すことが出来る。それも、ハウ・ツー式の考え方ではなく、著者の書かれたものを読むことによって呼びさまされた母親自身の感じ方、考え方から見出すことが出来るのである。この本は、読み手自身を、思考の主体者に変身させることの出来る起爆剤であるかのようだ。

どうしてこのような起爆剤になることが可能なのだろうか。それはひとえに著者の生き方ないしは視点によっ

ている。例えば著書の中で「……考える時間をいくらか持ったのちに、また子どもたちの中にはいると、新しい見え方がひらけてくる。育児ということが、ただ幼ないものの世話をするということだけではなく、人間にふれるときなのだと実感でき、楽しみが増してきた。」と述べている。育児がただの雑事ではなく、人間に触れる時であり、育てる人（母親）自らも育つ場であるという視点は何ものにもかえ難い。私達は、育児を世話することのみに限定して考え易い。しかし、育児という営みは、育てるもの自らをも育てる力を持っているのである。ただし、そのことに、気付かないでいると、育児はいつまで経っても煩しい雑事のままなのである。子どもの見かけの発達ばかりに目を奪われて、ことの本質を少しでもつかもうという努力なしには……。

著書は、育てることの四つの側面に焦点をあててまとめている。「子どもとのやりとり」「子どもの心にふれる」「子どもを支える」「子どもと人間について発見する」がそれである。それぞれに味わい深い小篇がぎっちりと詰まっている。その中からいくつか拾ってみると

「……手がかからないということは、この子とのやりとりが少なくなることである。意識してないがしろにするわけではないが、安心感からついあとまわしになることである。」とかく私達母親は、子どもの手がかからなくなることを良しとする傾向がある。手がかからないことで安心せずに「この子とのやりとりが少なくなることである。」ととらえ、「小さなやりとり」をとても大切に考えている。こういう日常のささやかなことをしっかりとすくい上げることの必要性をひしひしと感じさせられるのである。こういう時にこそ子どもは育つものなのであろう。又「外へ行くこと」の章では、「幼い子どもが外へ行くのを助け、安全に気を配って、ついて歩く日々は、そう長いことではない。楽しいときだったと思う。」と述べている。

子どもについて出て歩くということも、そのただ中にある母親にとっては、こういう日々がいつ果てるともしれないと感じられ、子どものそばについていながら、心

ここにあらずの状態になることが多いものである。それをさりげなくそう長いことではないと述べ、楽しいことだったと述べている。こう書かれているものを読むと、今迄またかと思っていた子どもについて歩くことも、もう少し積極的にかつゆったりとやってみようと思えるのである。さらに「よく遊ぶということ」の章では、「『よく遊ぶ』ということは、何となく私が考えていたように、楽しく、元気に、仲よくということだけではない。遊びはじめは、自分の中に涌き起こってくる意欲を、どうやって形にしようかと探っている。その中では必ずといってもいいほど、困難に出会う。思うようにいかない遊び相手や、おもちゃに怒り出すこともある。それらを乗り越えるためには、大人のひとことの励ましが、その場を支えもするし、こわしもする……」と述べている。これらの視点も、その場限りのただよく遊べばよいというものではなく、ことの経過を充分見つめ、存分に子どもと迷い進んできた著書の本分であるように思う。そこに至る過程をとても大切にしている。決して結果だけを追わないのである。

著者のように子どもと共に、自らの在り方も含めて考えてくると、母親自身が、もう一度、子育てをすることによって生き直すことが可能であるように思える。子どもと触れる中で起る様々なことどもに思い巡らすことはとりもなおさず、母親自身が幼なかった日々、記憶の奥底に沈んで、それまで陽の目を見なかったものに、再び光をあて、その意味を見出すことである。ここに子育てが、他者である子どもを育てることにとどまらず自らを育てる力のあるものとして浮かびあがってくる。この本は、その意味で、子育ての書であるにとどまらず、母親育ての書でもあるのである。だからこそ、読了した時、深い「安心」と「力」を与えられたのだと思う。

R・キング著
森楙・大塚忠剛監訳

『幼児教育の理想と現実』

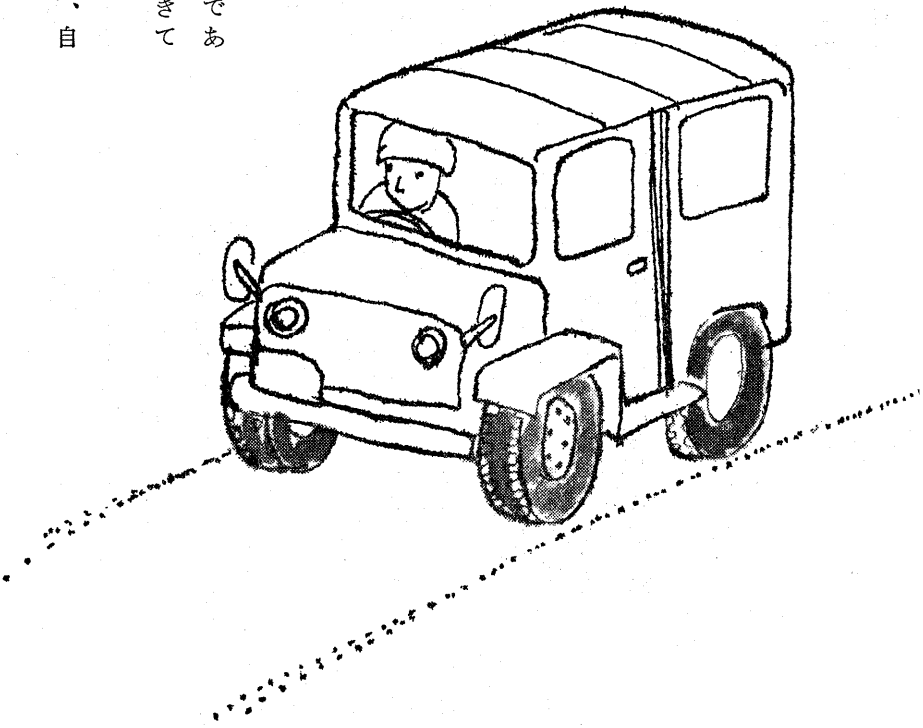
（北大路書房）

学級社会の〝新〟社会を

豊田　一秀

人間は、なかなか自らを見る事ができないものである。他人の言動と行動の不一致を指摘する事はできても、自分自身については気付きにくい。

一方で、教職という仕事は、仕事の内容とその人、自



身の生き方、考え方の重なる部分が大きい職業であると思う。特に幼児教育に関しては、その傾向が強い。この事は、教師が自らの保育を見直す事の困難さにもつながっている。

この本は、幼児教育とは直接畑の異なる教育社会学者が、イギリスの幼稚園（幼児学校）に実際に観察に出向いて書いた本である。現場の教師が無意識に持っている「よい子とは」「よい教師とは」といった事に関する教師のいわば当たり前観と日々の保育との関係を日の下にさらしていて、私のような現場の教師にとっては少々辛口な本となっている。

この本の原題“All things bright and beautiful?”は訳者によれば、英国国教会派の讃美歌の一節であり、イギリスでは多くの人々に愛唱されているという。ただし讃美歌には付いていない「?」がこのタイトルにはついている点に著者の意図がある。直訳すれば、全てのものは輝き美しいのだろうか?となる。ここでは全てのものとは、すなわちイギリスにおける幼児学校を指している。イギリスの「公教育の中で最も優れた部分」であるはずの幼児学校の教育が全てにおいて「輝き美しい」のだろうか、とこの本では問うているのである。

著者キングは「大規模調査、コンピューターにかけられるデータを必要とする研究に満足しなくなって」三年以上をかけて、三つの幼児学校を観察し、約五十万語にのぼる記録を集めた。観察の方法は本人が「まず初めに私は、身長が社会的距離を作り出すように立っておくことにした（教師が、しばしば同じ高さに身をかがめるやり方に気づいたからである）。」と言っているように、非参与観察である。これは著者の関心が子どもよりはむしろ教師に向いている事に由来しているためと言えよう。この点についてキングは「子どもは教師の関心の中核にあるのだから、本研究の中核も子どもである。」と言っているが、私には、やはりこの研究の対象は教師にあると思える。自ら教育現場に出向いて行って観察をするという、このキングの方法は社会現象学に基礎をおいており、このアプローチのしかたは社会学の中では「新」社

会学と呼ばれているそうで、それはそのままこの本のサブタイトルとなっている。

さて、著者キングは、この本の読者層を教育社会学の専門家よりは教師、学生といった非社会学者においていると述べている。当然ながら、私自身もこの読者層の一人に入る訳で、その立場からの感想を述べてみたい。

この本の一つのポイントが、イギリスにおける児童中心主義教育が、実際には教師中心主義的な教育になっているのではないかと事例をあげて実証しようとしている点である事については私はすでに述べてきた。例えば「早くしないと遊ぶ時間がなくなるわよ。」「いい子だから、これをして、やってくれるわね、先生のために。」「まあ、恥ずかしいわね、年長さんなのに。」といったこれらの教師のことばかけをキングは教師の社会統制と捉える。この捉え方に対して現場の教師が賛成するか反対するかについてはさて置き、このキングの見方から逆にキング自身の児童中心主義に対する、イメージと言ったようなものが浮き彫りにされて来るように私には思える。すなわち、幼児教育の専門家ではないキングが幼稚園での観察を通して、何を見たかを読み取る事で逆にキングの持っている幼児教育観の逆照射をみる訳である。

このような視点で、この本を読む事は、特に現場の教師にとって有意義であると思われる。ある章では著者の指摘に自らの姿を重ねる読者もいるであろうし、他の章では「全く見えていない！」とつぶやく読者もいよう。保育室の匂いのしてくるような事例が多いだけに現場の教師を引き込む力は強い。

著者キングが幼稚園を彼の学問的視野で捉えようとしたように、読者もこの本を一人一人の見方で読み取る過程の中で、逆に各人の持っている当たり前観が浮かび上がってくる事と思う。いずれにしても、現場の教師が、日々保育をしている「自分」を見るのによい刺激となる一冊である。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

ラット著
荻島早苗・末吉実栄子訳

『カンポンのガキ大将』

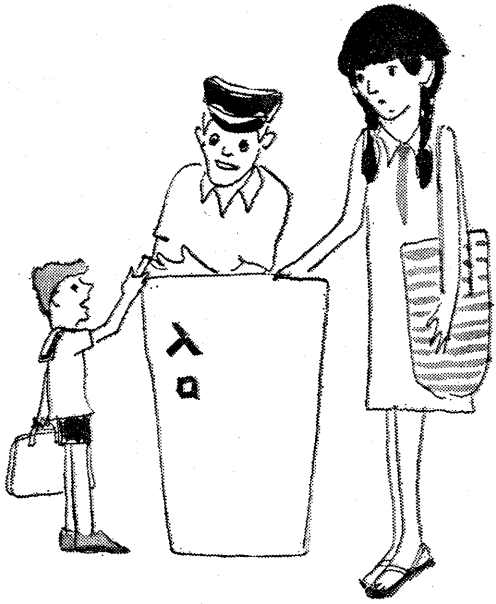
（晶文社）

近藤　伊津子

この本に初めて出会ったのは昨夏、インドネシア行を前にして、ユネスコ・アジア文化センターを訪ねた折である。隣国のマレーシアの本であるからにはインドネシアで入手できるに違いない。日本では近々、出版の予定はあるが早急に欲しいと依頼された。

そこで手に取ったのは『The Kampung boy』なる英語本であった。黒一色のタッチ、口に食み出さんばかりの沢山の大きな歯のキャラクターは極めて印象的であった。

夫の仕事について家族同行のインドネシア40日。ジャ



ワ島のバンドンに到着した日から本屋巡りをしたが、この大学街の本屋にも、主都ジャカルタでも見つけられなかった。後で聞くところによると、マレーシアの本はインドネシアにあまり輸入されていなかったということである。

ついでであるが、インドネシアでは子どものための本は少く、2～3色刷りで厚さも薄く、日本の子どもたちにはあまり歓迎されないのでないかと思うものが多かった。色とぼしい本棚にあのエルジェの『タンタンの冒険旅行』が目を惹いた。値段も一般の家庭の収入を知ると気楽に買ってもらえるものではなさそうだった。バンドンでは子どもの本の辺りであまり子どもたちの姿を見かけなかったが、主都ジャカルタのサリーナ・デパートでは、店員ものんびりしていて、子どもたちは追い払われもせず、漫画のところでは立読みをしていた。実は、その子ども達の姿を見てホッとした。と言うのは、街の子ども達がのんびり遊んでいる姿をほとんど見かけたことがなく、幼い子らもちゃんと働き（収入）をしていると

も聞いたり、ハイウェイで車が渋滞すると、その車の流れの中に新聞、タバコ、キャンデーを売り歩く少年たちを知っているからである。

さて、目当ての本は、街の本屋で見つけられなかったが、夫の関係で親しくなったマレーシアの女性の天文学者から、ラットのお国での人気ぶりを聞くことが出来た。国民的人気のある漫画家であると。そして結局、彼女が、秋に学会のため来日した折に、やっと手にすることが出来た。英語版であった。

ページを捲りながら彼女の解説を聞いた。まず「カンポン」の意味、ここでは、「村」「ふるさと」の意味である。

マレーシアといろんな意味で似ているインドネシアでは都心をメンテン、それに対して、はずれの方をカンポンとも言うようであった。メンテンの高級住宅の住人は軽く蔑みをただよわせてカンポンと言った。そしてジャカルタの自称カンポン住人は少し恥じらいながら、カンポンといった。そして私はその人にわが三鷹もカンポン

といった。

さてこの物語であるが、マレーシアのスズの産地（世界最大）の近くのとある村（カンポン）が舞台で、作者ラットの少年時代の自伝である。私にとっては未だ見ぬ国、マレーシアであるが、インドネシアに似ているというからには、バンドンからジャワ島を横断しインド洋に抜ける道中の村々、そびゆる椰子の林が果てしなく続くカンポンを思い浮べることが出来る。ここではゴムの林である。

この本の初めのページを捲ると、左側には父さんが赤坊を抱いている。右側には、高床式の家の板張りの寝室。小さな蚊帳が吊され産れたばかりの赤坊が寝かされている。その隣りに母さんは足に毛糸のソックスをはいて寝ている。朝の10時とはいえ、熱帯の地らしく、屋根の隙間から強い太陽光線がさし込み、木張りの床には丸い日の輪がいくつもできている。

生後45日目の「剃髪式」に始まり、イスラム教徒の子として通過儀礼が次々と展開されていく。小さくて外に出してもらえないラットは、屋根からもれる日の輪と戯れる。やがて外に出て歩きはじめたラットは近所のカティジャおばさんについてゴム樹液をとりに行ったり、すずの浚渫機をのぞきに行って、母さんに追われ、それを匿ってくれるアランおじさん。日没前のマンディー——川での水浴びにつれていってくれた父さんは、この上もなく滑稽で、大胆である。それに母さんの作るおいしいケーキ。父さんの自転車に乗せられて月一度の町への買物。小さな市場は、決まったところに、きまった品物と、きまった人がいる。ラットはかき氷を買ってもらう。とてもうれしそうなラット。

帰りの道では、踏切りでカンポンを無視して疾風のように走る汽車をながめる。

こうして、ラットはスズの産地近くの経済的にもわりあいに恵まれた村で、人情あふれる隣り近所の人々と、愛情豊かな敬虔なイスラム教徒の両親に囲まれ平穏に育っていった。この物語にはラットの止むことのない旺盛

な好奇心と父親譲りの大胆な、滑稽な呼吸はすみずみまで流れている。

やがて学齢を迎え、小学校に入る前に、コーラン塾に入る。これはイスラム教徒として教典「コーラン」の押韻形文をきちんと唱えられるよう学ぶ私塾である。おこわ一杯、$1、小さなムチ、昔からの仕来りに従い父さんは、先生に渡すことで入学が決る。先生は大きなムチを打ち鳴らして居眠りをする塾生たちをとび上らせる。

この塾で遊びの天才少年、メオール三兄弟に出会う。そしてラット少年はこの兄弟に依って、さらに自由に生きる喜びを知り、遊びに磨きをかける。

川での釣り、泳ぎ、魚のしかけ、魚のつかみとり……川の中も外も全てを知っているような三兄弟の鮮やかな身のこなし。いつしか、ラットも同化していく。21ページにも及ぶこのメオール兄弟との交流、自然の中で熱中しきっているさまは、この物語の圧巻である。私はふと、河合雅雄の『少年動物誌』と重ねてしまった。

歯がびっしりと前に出て顔中口だらけは、この三兄弟のためのキャラクターであると思う。思えばインドネシア、マレーシアのワヤンの登場人物にもこういう面があったようであるが、これはある典型を示すものなのかもしれない。(作者はオリジナルと言っている)

ラットは小学校に入ったのであるが、学校に、学友達に同化出来ない淋しさはますます三兄弟との交流を深めていく。鮮やかな遊びの場面があればあるほどに、学校へ囚われの身となり時をすごしているラットの消沈ぶりが伝わってくる。

その間に、従兄の結婚式があったり、そして、イスラム教徒の男子の慣習の一つの割礼が行われる。インドネシアの農村で、まぎれ混んでの割礼の祝宴。その間、ずっと泣いていた愛らしい少年の顔を思い出す。様子はかなり違うが、子どもの成長を村あげて祝うものであるのは同じである。

輝くようなラットの少年期にやがて陰りがみえて来た。

きっかけは、ラットが幼い頃から好奇心を抱き続け、禁じられていたスズ浚渫機に近づき、スズさらいをし、得意満面、そこに父親から思いがけなくも激怒されるという事件である。

父さんのゴム園につれて行かれ、父さんを継ぐ大人になることを知らされる。少年はゴム園に入り、ナタを手にして初めて自分の土地を踏みしめ戦慄する。

そして、中学受験、家から離れての地の中学進学。少年期の別れは少年を育んでくれたカンポン、ふるさとの別離でもあった。やがては、ラットの家族はゴム園をスズ会社に手離し都会に出ようともしている。カンポンを工業化が侵蝕しやがては消滅していくことを暗示し、この物語は終るのである。

マレーシアの豊かな農村、きびしいがやさしくもある母、滑稽なほど愉快な父、つまりは申し分のないモスラムの両親。モスラムの子どもとしての通過儀礼が次々に紹介されるのも興味深い。

前半の明るさに目を見張るばかりであった故に少年の旅立ちの悲しみ、再び見みゆることないふるさとへの限りない郷愁が、ずっしりと重く伝わってくる。

この物語は、それだけに止まったものではない。自然の中で遊びの奔流に身を任せる少年の、小学校での漠然とした不安は既に少年の日々のくらしを少しずつ侵蝕して、やがて、一挙に物語の終りに連がっていく。カンポンの自然と住人は近代化にいや応なく侵されていく。

少年自身が「学校」に入るために、もう一つはここは、ぼくの土地だ！と父のゴム園を自分のものになると自覚したときと同時にその地を永遠に手放すことになることで。

カンポン（ふるさと）との二重の別れであった。

もう一つは、少年が親から譲り受けるはずのものは、他者に渡り、全く別の方法で、別の土地で生きていくというところに現代の不安が現われている物語でもあるとも思われた。

（かっこう文庫主宰）

本田和子
皆川美恵子・森下みさ子著

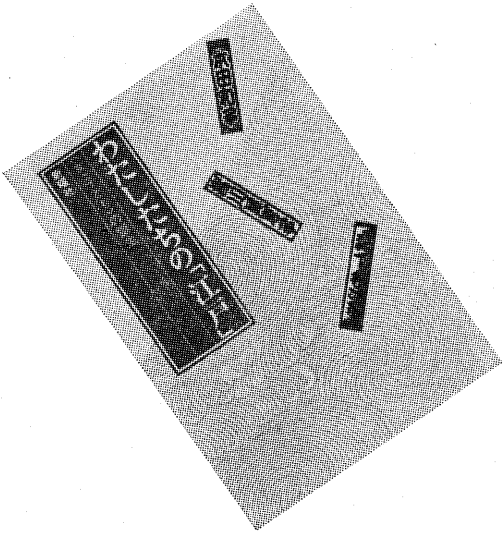
わたしたちの『江戸』

（新曜社）

私的な体験を交えたささやかな御案内

中村　悦子

世にいうゴールデンウィークにこの小文を書いています。一日おきの忙しい天気の続いた四月ですが、五月晴れの美しさを被い隠すには惜しく、それぞれの木々が半年を通して整えた緑の装いを照らしてさわやかな宴を演じています。



それに一歩近づくと枝元から葉先へと一葉一葉が微妙に色を違えているのがみえます。わたしのこのささやかな感動は、点描の画家たちの展覧会で、特にスーラの「モンマルトルのサン＝ヴァンカン街・春」の前で確かなものとして昇化されたように思いました。

点描の画家とは、つまり「明暗の調子で輪郭線を排し、『形』をマス（塊）でとりだし、色は混ぜることなくモザイクのように異ったものを並置しつつ点で置いていく」（「精神の視角—点描の画家たち」朝日新聞、4月17日）という新しい技法の表現者としてまとめられます。

彼らのどの作品も声高の主張はないのですが、耳を傾けると、日常の中の風のさやぎ、光の戯れ、瞬時の静止の後動き出す人々の息づかいが響いてくるようでした。

しかし、この一見軽やかな自然さの裏に、光の分割描法という実に厳密な色彩の法則に裏うちされ、過酷ともいえる労働を要する日々の画業があったことは驚きでした。

ささやかにみえる一点の点描は、小さき故に確実な腕の動きを筆先に凝集させねばならず、その間に精緻な関連を保ちつつ行う由に根のいる時間との戦いでもあると、点描画修復に生命をかける黒江光彦氏の言葉は、心にしみました。（この意は、ＮＨＫ日曜美術館「点描の画家たち」展による）

本の紹介に、何やら三題話めいた長い導入でしたが、実は、筆者の一人である森下みさ子氏から丁重な依頼状と共に送られてきた「わたしたちの江戸」をかかえていたわたしに、この展覧会のわたしなりの錯覚が、この本へのわたしなりの理解に重なったように思ったのです。本書の章ごとに、「『年端もいかぬ、小さなものたち』を探し出し、つまみだした」近世の人さながらに、江戸市中をかけめぐって、ささやかな動きを知の世界にすくいあげ写しだした才女たちの仕事が示されています。見事な切り口をみせた実相を新鮮な視点で結びゆく華麗なまでの文に眩惑されつつも、彼らがそれら読み解きに駆使する膨大な知識の累積に気づかないわけにはいきません

でした。

しかし、まず、絵を楽しんだように彼女らの誘いのままに、小さきものを手がかりに江戸という未知の世界への旅を堪能し楽しむのが先でしょう。

さて、本書を読みたいと思ったら、惜しげもなくカバーを取ってしまう図書館のものでなく、また汚れを嫌うのか包装紙で本を被う読書家のものでなく、自分のものが良いかもしれません。室町千代紙なるみ形の地紋に散る三人女の名札の流れにそって表紙を開けたいからです。ここで少しより道をすれば、この「知的に過激な烈女集団」（本書帯山口昌男氏の表現）の総師は、すでに三冊の単行本を上梓しています。したたかな挑発力をもった「異文化としての子ども」（紀伊国屋）は、ウィルレの「子どもの世界」から、本書の源流を示す「子どもの視野から」（人文書院）には「尾張童遊集」から、各々時代の子ども像が引かれています。一冊目の保育事例からの見事な跳躍を示した「子どもたちのいる宇宙」（三省堂）は、選書集の一冊であるため他書と右へならえの無地ですが、可能ならばいかなる絵が選択されたか想像するのも興味あることです。

画家の子どもをみる観察眼を尊重し、その絵を愛したのは倉橋惣三でしたが、これが更に絵解きの興を加えてこの保育文化研究者に流れているのでしょうか。

『わたしたちの「江戸」』には、「女・子どもの誕生」の副題がついています。昨今、様々な眼が都市的なるものの指標を求めて江戸へと注がれています。ここでは、それを女・子どもの浮上をしるしに説きあかす卓見をみます。女・子どもが生活者であるとともに、またそれ故に文化の享受者でもあることで時代を活性化させたことです。

かつて江戸の本屋について知った時、一八五〇年の頃それは「即に上方を圧倒して、完全に江戸中心に集中し」その数は、書物問屋八三軒、地本草紙問屋一四六軒、さらに貸本屋が七〇〇軒ほどとの記述に驚きました。（瀬田貞二「落穂ひろい」上・福音館）貸本屋がどの

ようなものか分らないままに、江戸八百八町のこと、ほぼ一町毎に図書館があったわけかと思ったことでした。しかも今回、それらの出版物には、女性向けの教養書や教訓書があり、それらにとりわけ妊娠や出産にまつわる記事がのり、育児論の輩出を生み、絵本・赤本が流行し、雛形の文様本にも子どもの姿があった等を合わせ考えれば、江戸の都市生活の活気と感性づくりに女・子どもの果たした役割の大きさを改めて思うのでした。

本書の構成は、第一部「小さきもの」の増殖、第二部遊ぎする知性、第三部老いと死とに分かれ、各々興味深い論が6編収められています。それを通立させるものとして最初に本田氏の席において「女・子ども」と「江戸的なもの」の相互性が論じられます。わたしは、まずその美事な語り口（本田節）にひかれて声を出して賞味したほどでした。他の二氏も師にまさるとも劣らない洗練された美文家です。新々るび付とはいっても、声高に読むのをさえぎる単語や引用文もあって、冷や汗も出ますが、夏の夜の知の比べにはもってこいかもしれません。半ばに至り、次の文に出合いました。

「王朝の女流文学にも紛うこの流麗な文章が、綴り続ける著者自身をも酔わせたであろうことは想像に難くない。そんな甘美な陶酔のなかで、この才女は綴りに綴り、ひたすら美しいことばの錦繡を紡ぎ続ける。このとき、先哲の教えか有職故実は、その嬋娟たる筆の運びをとどこおりなく運び進ませるための、恰好の素材であった。」（本書九七頁）評を受ける女流小説家と著者が、さながらにわたしの中で一体になってしまいました。

さて、先に述べた本書の三部構成・つまり記号化は、前者にその源流があって、それをあわせ読むことで理解がますように思えます、例えば、「『近世育児書』異聞」（「子どもの領野から」）には、この時代における「多種な階層から育児論を語る者が輩出」したことに目をむけ、三つの動きをすくい取っています。つまり「『小』の意味の発来」、「知識人の増殖」、「暗がりへの好奇心」

で、これらをもって時代の蠢動と人々の感性をあぶり出すのです。

森下みさ子氏の「憫笑『鼠の嫁入り』」は、「舞々」掲載時にも興味深く読ませていただいたのですが、今そのところを得て、ねずみによせて「小さきもの」の増殖の意味を鮮やかにみせてくれます。

その昔、私は人体に動物首が生々しくすえられた講談社の『こがね丸』の異様さに夢見した経験があるのですが、わやわやと怪しげに立ち働く線描の鼠の生活絵巻を面白く眺めました。こがね丸の犬は、なるほど、ねずみほど私たちの生活において両義的な役割をあわせもつではなく、また、こがね丸が、仇討を完遂して親孝行を説く内容に対し、鼠たちが生産・台所仕事と家庭生活の営みを表わして、女への啓蒙に役立ちつつも、小さきが故に笑いを誘いつつ見下すものであったという違いに、今納得するのでした。

養育者の「慈」、しかも、その幼き者の命が「死の陰翳に深々と取り囲まれている」ときの憂慮と危惧は、江戸期にいかずとも心打つものです。皆川美恵子氏の「桑柏日記にあらわれた子どもの病い」は、下級武士で、かつ孫を抱く祖父の、息子を看る父の10年にわたる日記体の書簡＝「家庭の記録」を資料に、私たちに「庶民生活のありさま」を伝え知る術を示してくれます。

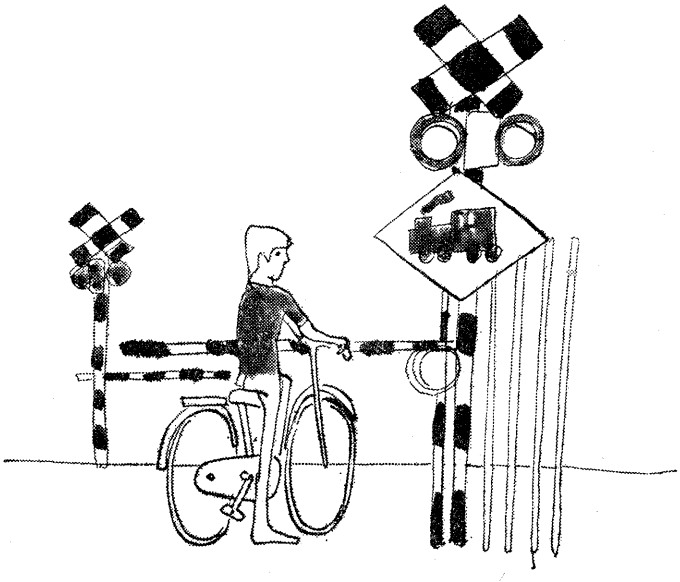
子どもの病気、それは当時、「6歳を無事に迎えることの出来る子供は、10人のうち7人以下」であり、しかも、疱瘡は死因の第一位で、生死を分けるものであったといいます。可愛げに成長した子どもの罹患は、家中の一大事であったことは想像されます。ここでは桑名と柏崎の地で、時を同じくして罹病した様子のうち、特に祖父の手で描かれた「疱瘡除けの呪い」から、無事かさぶたも落ちて全快後の配り事宴会まで、1年と4カ月の間の二〇余件にわたる事々の分析（この合計表は「子どもの領野から」　「『ひめやかな』世界―子どもの『病気』の意味するもの」に掲載されている。）をふまえて、人々が病に「実にていねいにつき合う様子」を浮かびあがら

せていきます。そして、疱瘡の経過が、まさに、子どもにとって「人の仲間」に入る通過儀式であり、祝祭であったことを説き明かすのです。

一方、私どもを暗澹たる心地に誘う病が、別の子の二年にわたる胎毒をめぐるものです。「左の目ぐるりより耳のあたまへかけ岩の様」になってかゆがる子どもを母親のきくは、「懐へ入立過し」介抱し、憔悴していく様を記して、夫は「骨身もけづらるる様」と言います。一生一患の通過儀礼的様相をきれいに示した長男の病を描く祖父の筆と、胎毒の言葉の示す通り、「母の培地（旧根）」故と見われる病を得て苦しむ妻子を記す夫の筆とを対比して示しつつ更に、当時、家族が、地域共同体が子どもの育ちに深くかわっていたこと、そして父親が確実に家庭の人とても在ったことを強く印象づけるのでした。

小児医学が進んだ今日、肉体の病は少くなり、『『病』を通した子どもとの対応能力は遺憾ながら衰退しつつあろう」と切り込む皆川氏の言にうなずきつつ、心の病という現代の苦をかかえる子と母の姿を思いました。「わたしたちの江戸」それは、江戸にすかして、わたしたちの生活を考えさせるものでした。

（大妻女子大学）



コンラート・ローレンツ著
日高敏隆訳

『ソロモンの指環』

（早川書房）

広瀬　久美子著

『女の器量はことばしだい』

（リヨン社）

ひぐちみちこ著

『かみさまからのおくりもの』

（こぐま社）

村石　京子

ソロモンの指環　コンラート・ローレンツ著

一般的に言って訳本はとかく難解なことがあります。どこの国の言葉にも、その国の独特な言いまわしや例文などがあるので、それを日本語に直したものはどこか文章不明な個所が時折出てくるため、私にとってどうも退屈な読み物と化してしまうことがありがちなのです。

K・ローレンツの「ソロモンの指環」は訳本の一つであり、しかも表題には——動物行動学入門——とある、一種の専門書です。

それなのに、こんなに楽しく読むことが出来るのは、一体何故なのだろうかと考えてみました。

1　個の短い話が書かれていて、読みたいと思ったものどれからでも読んでいける。

2　さし絵がかわいらしく、しかもリアルである。

3　どれも身近にいる動物たちの話である。

全く動物好きの私にとっては、うんなるほど！

とうなずきながら読んでしまうのでした。

4　行動学に関する専門用語がほとんど使われていない、などなど。

こんなことが、この本が魅力ある本として人々に親しまれている要因かと思います。実際この本は、既に多くの人の心をとらえています。行動学に興味のある人は勿論のこと、鳥の好きな人、犬の好きな人、魚の好きな人などにとって、とても興味ある書物です。そして更に私は、人間学を学ぶ人にもっともっと読んでほしいと思うのです。なぜなら動物行動は、人間と著るしいかかわりがあるからなのです。

この本の中で印象に残っているところを二つ程あげてみたいと思います。

一つは、ローレンツ博士の目を通して見た動物たちは、実に人間くさいということです。しかし博士は、動物が人間に似ているのではなく、「どれほど多くの動物的な遺産が人間の中に残っているかをしめしている」と言っているのです。

人間は独立した特別の生き物では決してないのです。ダーウィンの進化論でいえば、生物のおおもとは、三〇数億年前の海の中のもやもやした微生物であって、それが魚になり、あるものは陸にあがって爬虫類となり、またあるものは鳥になったり、猿になったりしてきたと言われています。人間の胎児は、実にその三〇億年の進化を、母親のお腹の中にいる約二八〇日で遂げてしまうのです。ですから、胎児の脳の形はその発達の途上で、魚のそれであったり、鳥や猿のものとそっくりなのだそうです。

人はあらゆる動物と同じライン上にいるということ

を、私たちは時として忘れがちです。しかしもしも都会の雑踏をのがれて、自然の中に浸っていたら、進化の途中で忘れてきた何かを思い出せるのかもしれない……。そんなロマンがあってもいいなとふと考えてしまうのでした。

もう一つは、これが私にとってこの本の吸引力であったのですが、私たちのまわりの愛すべき動物たちと、もっともっと仲よしになることの素晴らしさが描かれています。動物と人では、人と人のときとコミュニケーションの方法がちがいます。動物は、人間同士のときよりも、もっと敏感に私たちの心をとらえていることが多くあります。この姿のちがう友人と心を交わす魅力は、私にとって本当に素晴らしいことなのです。そしてこの本を読んでから、家で飼っている犬をはじめとして、動物たちが以前にもまして愛すべき存在となりました。

この本を読まれた方は、きっと私と同じように、動物と一緒にいることが、もっともっと楽しくなることでしょう。

女の器量はことばしだい　広瀬久美子

本屋さんで見つけると、思わず手を出してしまうようなタイトルですね。

頁を開くとすぐ目に飛びこんでくる「広瀬さん、手術だよ」という書き出しは、著者の病院での体験にもとづいたものですが、多くの人は病院では大なり小なりの似たような体験があると思います。気性の大へんしっかりした（と私には思われるのですが）この方でさえ、お医者さんの診断に一時は大へんなショックを受けたとのことです。でも万一を願って他の病院を尋ね、そこで自分が信頼して自分の身体をあずけられる医師にめぐりあい、安心して診断を待たれた体験が書いてあります。これは、この本の内容とは直接かかわらないにしても、身近な生活体験として何かとても参考になる話として、冒頭にふさわしく印象的でした。

サブタイトルとして――本音で生きたい――とあります。これは日頃私も願っていることなのです。本音で生きたい、本音で語りあいたいと思うのですが、人とのかかわりあいの難しさに頭をかかえてしまったり、自分の気持をうまく相手に伝えることが出来ないで落ちこんでしまったりすることがあります。本音とはいったい何なのでしょうか。それは、決して自分の意志を押しつけるものではなく、相手の立場を尊重することを否定するものでもありません。また、相手を思いやる優しさを失なっては、語りあっても何も生まれてはこないでしょう。こちら側のもっている誠意、熱意、心情といったものを相手に伝えていくことなのです。これが相手を納得させ、説得していくものなのだと述べてあります。

「生きたことばを扱う職人」と、NHKのアナウンサーである広瀬さんは自分の仕事柄を言っていますが、私などは、日頃幼児のことばに関心があると言いつつも、自分自身ではいかに不用意にことばを使っているかとしみじみ思ってしまうのでした。人間関係をよくもわるくもする鍵として、ことばは実に重要な役割をとっているのに、ふだんはあまりにも身近にあるために、かえってその大切さを忘れて使っていることが多いのですね。人と人とのかかわりあいを大事にしていきたいと願っているのに、片方でぞんざいな言葉えらびや物言いをしている自分であることに、恥ずかしく思ったりもするのでした。

そして読みながら「本当にそうだわ」と多いに感じたり、あるいはふと「でも私は……」などと著者のアナウンサーという立場と、私のおかれている教師という立場の違いを思ったりして、何故かときどき読んでいる最中に、自分が出てくるのです。仕事は全く違うのですが、職業人という意識をもった比較的年令も近い女性の著であるので、そんな読み方をしてしまったのでしょうか。でも仕事は違っていても、「聞く勇気」「声をかける勇気」「誉めおしみをしない」などといったことは、全く私の身のまわりでも多いことです。いろいろ考えたり、教えたりすることも多く、そして面白く読めたのです。

御紹介する気持になりました。

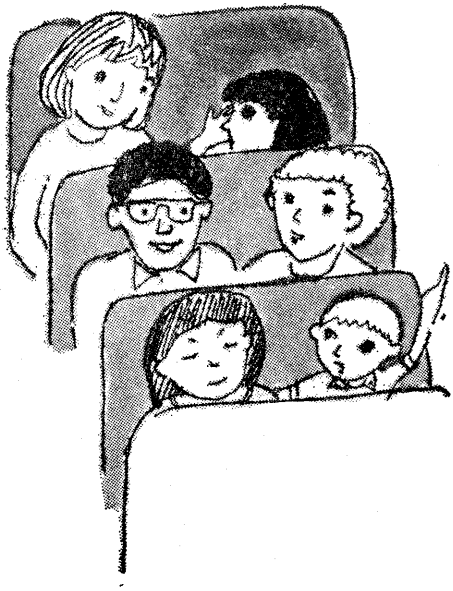
かみさまからのおくりもの　ひぐちみさこ

四才児クラスを担任していた一年間に、小さな家族のふえた子どもが三人程ありました。時折、赤ちゃんのことが話題に出ています。またもう少し年令の近い兄弟同士であっても、そのかかわりあいがいろいろと話題になります。そんな頃、この絵本を見つけましたので、クラスの子どもたちに読んできかせました。

赤ちゃんが生まれるとき、神さまはひとりひとりの赤ちゃんに、とてもふさわしいおくりものを下さいます。それをはこんできてくれるのは天使なのです。このおくりものがどんなに素敵だったかを教えてくれるのは、そこに描かれている楽しい絵です。兄弟のいる子もいない子も、みんなにこにこしながら聞いていました。そして可愛い絵を見ながら、胸の中でいろいろなことを想像していったことと思います。

みなの前で読んだあと、本立てに立てておきました。かわりあって、この本をとり出してくり返し見ています。きっと子どもたちの心に、何か暖かいものを伝えてくれるからなのでしょう。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）



養護学校の日々

線と点

津守　真

保育は日々の継続の中でつくられるが、一日の、あるひとつの場面を、保育者がどう見るかによって、全体の性質がかわってくる。継続を線とすれば、一日のひとつの場面は点である。線の性質は、既に引かれた部分によってではなく、先端の点の動きによってきまる。点は、その場の判断により、自らの方向をきめる自由をもつ。保育は、前日からの延長線の上にありながら、この日の時点で、その場面をたしかに見ることによって、新たな

動きをつくり出す。そのことを考えさせてくれた最近の保育について述べたいと思う。

レールからはずすこと

Tは床の上で自動車をいじっていた。私は少し離れたところでレールをつなげはじめると、Tはすぐに近寄り、自動車をレールの上にのせた。そのときに、車輪を半分レールからはずしている。私は電車をレールに置いて動かすと、いそいでとんできて、車輪を半分レールからはずしてしまう。

この子どもは、長い間、回転する物を特別に好んだ。けれども、冬休みの明けたこの日、子どもの心には変化が生じているように思われた。この場面に、まるく循環するレールの束縛から自らをはずそうとする子どもの意志を、私は見た。

そこで、私は、レールをまるく連結するのではなく、方向をはずして、S字型に床の前方に開放するように置いた。すると、Tはレールの上を歩いた後、その途切れるところにくると、広い空間へと歩いてくる。私が前方でTを抱きしめてひっくり返ると、ふだん声を出さないTがケラケラと笑う。それを何度もくり返した。そのうちに、Tは自分できめた方向に歩いてゆき、自分で見つけたボールを蹴ったり、ころがしたりする。机の下にいれたボールがはみ出してころがり出ると、声をあげて笑う。レールから自らをはずすことへの能動性が、更に積極的な自己実現へと向う第一歩であろう。

この日から後、Tは砂場に入り、水を流し、積み木を並べ、ガレージを作って自動車を出し入れするなど、その変化は目覚ましい。もはや、特定の大人とだけでなく、むしろいろいろの人たちと遊ぶのを楽しんでいるように見える。このような変化は、積み重ねられる日々の中で明らかになってゆくのであるが、その最初の時点では、未来は未知であり、それを開く鍵は、現在をいかに見るかにある。ささやかな一日のことであるが、この日のひとつの場面に、レールからはずそうとする子どもの意志を見ることがなかったならば、それにつづく時間

も、日々も、違ったものとなっていたかもしれない。

切ること

Kは、最初に私が見たとき、熱心に紙を切っていた。その瞬間を見ただけでもわかるのだが、Kはそのとき何か自分自身の活動をしているように見えた。しかし、Kが何をしようとしているのかは、子どもがその行為をやりとげるまでつき合わないとわからない。

Kは画洋紙の一端からはさみをいれ、へりに沿って切ってゆくので、私は渦巻を切っているかと思った。ずっと以前に、二才になる私の子どもが、同じように折紙のへりに沿って紙を切っていたことがある。紙の縁に沿って直線に切る行為が、経果として渦巻になることを発見して、そのとき私は驚いた。Kが紙のへりに沿って切るのも、渦巻を作っているのかと思ったが、その見方は、どうやら、この場合にはあてはまらなかった。Kは途中から切り進んで、一本の長い紙片にし、はしから2センチメートルくらいに次々に切り、その切れはしを屑かごの中に落していった。それを切ってしまうと、別の画洋紙を細長く切り、それも2センチメートルくらいに切り刻み、切れはしを一ヵ所に集める。それをやりながら、Kは私が紙を支えて切り易くすることを期待し、また、私の膝によりかかって作業をする。そこにあった数枚の画洋紙と、新聞紙も、同様にして切り、小さな紙片の山をつくった。それだけやると、立ち上り、後も見ずに庭の方へと去っていった。

Kはこのとき何をしようとしていたのか。渦巻をつくろうとしたのではないし、ただ直線を切ろうとしたのでもない。もちろん、めちゃくちゃに切っていたのではない。これだけの丁寧な作業には、何かこの子どもとしての考えがあるにちがいない。しかし、それが理解されるには、Kの語ろうとするもっと他の行為を見なければならない。Kとは、すでに過去二年以上のつき合いがあるのだが、この切る行為には、Kは未来への可能性がかくされているように思えて、過去の積み重ねの中だけで考えるのは早計に思える。もっと時間を待たねばならな

い。

しかし、このひとときの行為は、Kにとって次の行為を展開するのに意味をもっていたにちがいない。それが何であったか、私には分らなくとも、Kにとって意味のある行為が私との間で生み出されることはたしかだと思う。私の膝によりかかったり、私の手が支えることなしには、この行為は生れなかったであろう。

二つの点は、ときに方向をきめかねて、互いに寄り添ったり、はなれたりしながら、共にさまよう。そのときに、思いがけず、面白い線の形があとに残るのではないか。

連休の合間の晴れた一日、二人の母親が、デニムの前掛け姿で、大きな箱に花の苗を一杯かかえて門からあらわれた。郊外に住む母親が運んできた花を、あちこち場所をさがして、保育の最中に植えてくれた。

二年間かかった隣接する建物の工事が終り、防護布もとれて、庭はようやく静かな落着きをとりもどした。二週間前には、これも、三月に卒業した親の好意による植樹がなされ、都会の真中とはいえ、緑のある環境となった。狭いながら、椿、山茶花、木斛の並木と灌木との間に、小径もできた。数年の間に緑が茂って林間の哲学の道となる幻想を画く。

こうして、母親たちが、突然、花をかかえてあらわれると、私共だけでなく、親たちが、ここを子どもたちの成長する場所とするのにいっしょうけんめいになっている、その温かい思いが伝わってくる。保育の現場には、親たちとの相互性による支えがある。うかつに時を過せないという気になる。灌木の下にベゴニア、マリーゴールド、ひげなでしこが一列に並んで咲いているのを見ると、そのことを思い起させられる。

（愛育養護学校）

「桜」そして

燕木寿江

四月の始めに、特殊学級に入学したYちゃんを訪ねて、K市の北部の小学校に行った。一組五人で、五十歳位の男の先生が、一生懸命に子ども達に話しかけていた。「体操をします。体操着に着替えなさい」先生はさっさとトレパンを着て、鍵を持って縦て型の大きな昔の電蓄の蓋を開けてレコードをかけた。教室いっぱいにラジオ体操のメロディーが鳴り始めた。けれど誰も動じないので、今度は先生が体操服の入った袋をめいめいの所からはずして渡した。しかし一向に着ようとはしないでいると、さっきまで机の下に横になっていた男の子が、一人一人に手伝うというよりも、ボタンをはずして着替えさせていった。「あの子はあれが得意でね、上手なんですよ。しかし、この子の親達は六年間かかっても脱いだり着たりも教えられないんですよ……」「だから先生

にお世話になっているんです」と、私は言いたかったが黙っていると、「今の親は何をしているんでしょうね。何でも学校に任せるというのはどういうことなんでしょうね」グルグル回っているレコードを一時とめて又かけた。体操をしているのは先生一人だけで、机の傍から動かない子ども、思いだしたように手を前に上げる背丈の一番大きな子、私を不思議そうな顔で見ているクラス唯一の女の子、黒板の方に走っていく子……又、着替えさせの名人は机の下に横になってしまった。あんまり長くお邪魔してもいけないと思って、「一週間たったら来ます。」と、約束して帰って来た。

二階の教室へ通ずる外階段も覚えて今度は午後お訪ねすると、先生は園芸のことで、席を外していらっしゃった。(他の先生が、園芸と言われたので、「演芸」かな……と、ふっと思ってすぐ打ち消した)待っていると、用務員さんが熱い紅茶を持って来て下さった。それが何故か特別おいしく感じられた。しばらくすると先生が入っていらっしゃり、掲示板に留めてあった日付の入った子ども達の絵を外して、持って来て説明して下さった。教室の中の拡声器が、「国語の○○先生、算数の○○先生、○組の教室に集合して下さい」と、放送した。「断ってきます。先生と話していた方が勉強になるから」と、冗談を言って立って行かれた。すべて理解していらっしゃるとは思いつつも質問されるままに、何と言っても親子関係が大切なこと、安心感の貯えが貯水槽を満たすと、その管を通ってどの蛇口をひねっても、『興味・積極性・聞き分け・しつけ・自立・友達遊び・模倣・学習・ことば』などの水が出てくることを学んだ通りに話し、私自身も十名余りの例にふれ、この通り実行してよかったことを、矢継早に話した。そして、ティンバーゲン夫妻、田口恒夫訳編の『自閉症文明社会への動物行動学的アプローチ』(新書館発行)の本を紹介した。先生は丹念に書き留めていらした。

見送って下さった校庭には、満開の桜の花びらが遊んでいる子ども達の上に、折からの風にのって戯れているように散っていた。歴史を思わせる太い樹が一本と、あ

と五、六本の大きな桜の木があった。校庭を少しずつ増やしてきたのか、塀に添って並んでいる木ではなくて、中央からは離れて自然に実生したと思われるような桜の間隔が一層の風情を添え、走ったり、ボール投げをしたり、縄とびをしている学童の歓声と花びらがマッチして、日本ならではの豊かなのどかな雰囲気をかもしていた。

「桜、綺麗ですね——」思わず声をあげると、

「え——、でも今年限りですよ。この運動場は雨が一日降ると十日間も運動会ができないので、全部掘り起して下水工事をするのには桜が邪魔だし、桜を移動すると費用が三倍もかかると言われるのです。」

「わあ、勿体ない。」

「そうなんですよ。勿体ないんですよ。みんな体制に流されて行ってしまうだけなんですよ。」

「運動会はまた晴れた日を選べばいいし……あの桜だったら二十一世紀にも咲いているのに——」自分の感情をこらえて小声で言うと、

「二十一世紀があるんですか?」と、大きな声が返ってきた。二回お目にかかったところでは私より歳下の先生かとお見受けするのに、「疲れますね」とか、「大変ですよ」とか、(とても熱心で温かい先生だと後で聞きましたが)一見、年寄り染みたことを言われていた先生が、「えっ! 二十一世紀があるんですか」と私を見た眼は、ランランとではなくて、ガンガンと怒りに燃えているように思えた。「そう信じたいんです。」私はやっとこれだけのことを言って別れた。バス停までの小径を、校庭の桜を何度も何度も振り返りながら、歩いて行った。胸が締めつけられるような思いで、なかなか来ないバスを車の烈しい埃の中で待っていた。現代は「思想を持つのが怖い時代」と、ある学者が言った言葉がからまわりをして響いた。

(神奈川・市ヶ尾幼稚園)

SF的読み解き
子どもという風景

第六回　開かれた地平

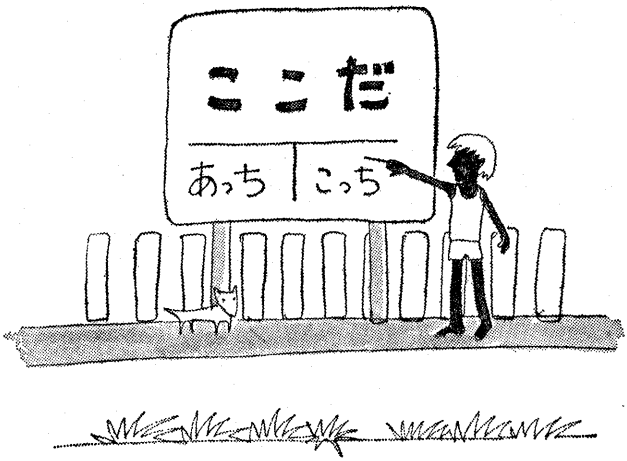
堀内　守

選択への誘い

テレビの画面をぼんやり眺めていたら、突然聴き慣れたメロディが流れ出した。

そのメロディは、これからニュースが始まるぞという合図であり、こちらはつい先頃までのぼんやりした状態から少し緊張した状態に構え直した。改めて考えてみると、テレビの番組にはいろいろな音楽がつきものになっている。ドラマの開始にも、途中にも、終わるときにも音楽が入る。

注意して聴いていると、その音楽のなかには、単純な



メロディの反復のものが多いことがわかる。つまり、いつ、どこで映像が終わってもよいように作られているのである。

楽譜を想像してみよう。起点はきまる。ある基本的なメロディがきまる。次にはそれを反復させる。一小節ごとに、完結した印象を与え、かつ次へ連続する形に仕上げなければならない。どこで切られても不自然でないようにするにはいろいろ工夫が必要であろう。

こういう仕組みでできあがっている曲は、実はだんだんふえている。それは完結したメッセージを与えてくれるわけではたいし、作曲者がこの曲に籠めたテーマを一義的に示してくれるわけでもない。鑑賞者がそれを聴いて、さまざまに解釈できるような余地をはじめから含んでいるようなのである。

組合わせ

子どもの遊具のなかにはこの曲相のように、さまざまな部品を組み合わせて遊べるような種類のものがある。なかには、組み合わせの手順が示されている図がついていて、その図に従って組み立てていくと完成するというものもある。しかし、設計図がなく、遊ぶ者が自分で任意に組み立てていくと、そのたびに新奇な形ができあがるというような遊具もある。組み合わせは自由自在、子どもの中に意識的に自由な行為を助長させようとし、彼を無尽蔵の関係の網目の中心として仕立てあげるようにできているのである。だから、この種の遊具で遊ぶには、この関係のまっ只中で自分自身の形を創造することが主眼になる。

設計図を与え、それに従って部品を組み立てられるようにしてあるものとくらべると、設計図のない右の種類の遊具は、自由で創意ある応答を要求するわけである。

面白いことに、この点を古代の人びとも見のがしてはいなかった。例のプラトンは『ソピステス』の中で、以上とよく似た議論をしている、たとえば、画家が画くとき、彼はあるがままに（つまり客観的に）描いているのではなく、画を見てくれる人にどう見てもらいたいかに

心を配って描くのだというのである。これは大変面白い議論である。つまり、画というものは画家が自分の解釈を享受者に勝手に押しつけるのではなく、享受者の参加する余地を残しておかなければならないというのだから。

もっとも、この議論のモデルになっているのは、音楽や画そのものというよりも、ドラマであるかもしれない。一つの上演に対して一つの解釈しかないというようなドラマはないだろう。ドラマはその点では実にさまざまな解釈の余地を残している。

寓意の層

ヨーロッパの中世においては寓意解釈の理論が発展する。最初は聖書に関する解釈法だった。のちには詩や絵から彫刻までがその解釈法で幾重にも説明され、解釈されることになる。その解釈の特徴は、単なる字面を超えようとするところにあった。聖書の一節を字義的に解釈するだけでは足りない。それに加えて寓意的、道徳的、天上的という三つの文脈で読み取るべきであるというのであった。発端は聖パウロあたりまでさかのぼる。私たちになじみ深いのはダンテの紹介しているものだろう。

読者は多様な意味を読み取り、その時の気分に応じて読み解きの鍵をつかう。そういう都合のよい場合もあったろうが、寓意解釈の担ったのは先行する解釈をさらに進展させるということであった。

中世に寓意像や寓意図が生み出されたのは偶然ではなかった。動物寓話集は、〝動物〟についての物語ではなく、〝人間〟を語っていたのであり、〝苦悩〟や〝歓び〟や〝笑い〟を語っていたのである。これらをきまりきった一つの意味に還元することは、寓意の世界の戯れを押し殺すことでもあった。

暗示の詩学

事物を名指すこと、それは詩の楽しみの四分の三を取り去ってしまうことである。このような表現をしたのはマラルメであった。言い換えよう。この発言は、単一の

意味を避けて、語のまわりにいろいろな余白、余地を与えて、不定のくまどりを広げていき、無数の暗示を孕ませようと意図しているのだ。

子どもの発言はこの暗示の詩学によって、常識的な（一義的な）世界からはみ出すことができる。

暗示するとは、単にぼんやりとしてしまうことではない。発言はその都度子どもの情緒的で想像的な織り物としてあらわれるのである。私たちは複合的で無尽蔵の生によって活気づけられている。その世界にいくたび訪れても、そのたびに異なった印象を得るように。それは、どこからはじめてもよいということを示唆している。このように読み取れ、とかこのように読み取るべきであるという強制よりも、どこから入っていって、どこから出ても様々な関係や傾向や図柄や紋様が私たちを挑発してくれるような世界なのである。有限であるのに無限であるような世界を前にして私たちは自分自身へ戻ってくる。

そのとき私たちの心に湧き起こるのは病的なあいまいさではあるまい。そうではなくて、このあいまいさのごとく見えるものが私たちに解決方法を考え出すよう迫ってくるという事態に目を向ける必要があるだろう。

子どもへの哲学

二十世紀にいたるまでの思想の範型を眺望するとき、注目されることは、すでに検討したようなできごとがさまざまな分野で生起しているということである。一つの作品に一つの解釈があるわけではない。ある作品は、いろいろに解釈でき、どんな解釈をしてもその作品を汲みつくすことはできない。むしろ、多様な解釈はそれぞれが補ない合って、万華鏡のように新しい作品を生み出していく。

では、事態はあいまいさの中に溶解していってしまうのであろうか。そうではない。「あいまいさ」ということを考えるとき、私たちはしばしば以前の説明にとらわれがちなのである。習慣は私たちの思考を軽減してくれる。習慣に従ってこの事態を見れば万事が「あいまい」

に見えるような時代になった。ところが、二十世紀に共通する知の動きは、習慣的な見方に安住せず、それを超えたところに身に置いて、慣習や制度によって安定し、沈澱してしまう以前の、みずみずしい可能性をそのまま把握したいというところに向かっている。

平たく言い直そう。あなたは自分が十歳の時、子どもについて考えた。また二十歳になって考える。三十歳になって考え、四十歳になって考え……。そのたびに、「子ども」は異なった現われをしたはずである。つまり、こちらも座標軸を変化させているし、「子ども」も独自の座標軸をもち、時々刻々と変えつつあるのである。

このように解される「あいまいさ」は、量子力学でいう不確定性と非連続性というような概念を思い起こさせるし、また他の一方ではアインシュタインの物理学の世界の状況をも想起させるであろう。

寓話の解釈

さて、冒頭のテレビに戻る。ニュースのあと、チャンネルをまわして『狼と子羊』というアニメを見た。この寓話は何度読んでもふしぎな〝味〟を与えてくれるように思う。それは、「めでたしめでたし」で終わっていないし、「大団円」で完結しているのでもない。狼が子羊を食べてしまうというのがオチなのだが、その途中、狼が理由がないのに理由をひねり出すところに不気味さがひそんでいる。

なぜなのか。そもそもできごとの動因に「なぜ?」と問いかけることからプロットが生まれる。プロットは単なるできごとの列挙ではなく、この問いにしたがって、できごとを再構成する。ではなぜ狼は子羊を襲ったのだろう。理由はない。強いていえば、彼の飢えの故である。ではなぜいきなり襲わずに、あれこれ理由を見つけようとし、子羊がそれについて弁明しはじめると、なぜいらだつのか。

いずれにしても、この物語のプロットは、狼が苦しまぎれに言いがかりをつくり出していくところから生まれている。狼の言いがかりに対し、子羊はこの危機をのが

れようとして、「事実」に従って反論していく。ところが、この反論の根拠が明確であればあるほど、狼はいらだち、ついには有無を言わせぬ形で「理由などない」と言い切る。つまり欲望がむき出しになったのだ。

狼と山羊は子どもの世界でも強者と弱者の寓意である。「狼はけしからん。子羊はかわいそう」というような感想では子どもは納得できないだろう、

それを認めるには勇気がいるが、身のまわりにこの〝狼〟や〝子羊〟がわんさといることに気づくのはこういう物語を読んでその寓意を読み取る力がついてからである。

両者の会話はどうだろう。狼役のセリフはいろいろな演出が可能である。いかにも乱暴そうな、暴力の持ち主であるかのように終始することもできる。また、反対に、一貫して慇懃(いんぎん)な口調で続けてもよいだろう。その方が凄みが出るかもしれない。羊役の方はどうだろう。無邪気な声色で応じるか、緊張がしだいに高まっていく形で演出するか、いずれにしても、双方は別口には考えられないだろう。両者の掛け合いが問題になるのである。

道徳論的な解釈だけで終わったのではこの寓話の面白さは何分の一かになってしまうだろう。これは読み方いかんによっては、こんな短かいものなのに、幾通りものやり方がありうる。狼の代わりに子羊を置いて、子羊の代わりに草を置いてみても寓話の構造は変わらない。

狼のシンボルと子羊のシンボル

狼はある時代から残酷な主人公の形象を与えられた。子羊の方は可愛げのある、弱者の形象を与えられた。これには長い歴史がある。山下正男氏によると（『動物と西欧思想』中公新書）、羊のイメージとキリスト教は不離の関係にある。狼は異端者のイメージだった。それに対し、羊はキリスト教徒のイメージになった。ヘブライ的な神は羊飼いのイメージで現われる。

あの寓話に出てきた狼と子羊は、宗教的な関係よりも政治的関係でとらえられる。「迷える羊」よりも、犠牲獣である。そうなるとふたたび宗教的な関係に戻ってし

まうが、狼は、羊が財産、犠牲獣、キリスト者のシンボル、被支配者というような多様なイメージをもっていくのに対し、飢えている肉食獣として形象化されていった。

これらを丹念にたどっていくと、この物語にたった一匹だけあらわれる子羊は、群から離れた「迷える子羊」であるということにもなりうるだろう。英語の sheep は単数でもあり、同時に複数でもある。それは羊が群れをなしている動物であることから生まれた表現であるに違いない。こんなことから「群を勝手に離れたらいけない」という教訓譚にも仕立てあげられた。

この物語を何度も読んでいるうち、しだいに狼は雄であり、子羊はしだいに中性に近づいていく。厳密にいえば、雄でも雌でもない、それを超えた中性に思えてくる。会話がそうつくられているからである。もう少しセリフが短かくもなる。

狼や羊に対するイメージは、実物を見る前にこうして形づくられていく。だから、子どもがホンモノの羊に出会うと、イメージとホンモノとの間があまりにも違うものだから、羊に恐れをなすこともありうる。現にそれと同じことがウサギやヤギについても起こっている。

狼が獰猛（どうもう）な動物であるという思い込みは、やはりこの種の物語から形づくられていく。『赤ずきんちゃん』はその典型だろう。

少し観点を変えてみる。

狼は家畜ではなかった。これに対し、羊は飼う動物として古い時代から人間のさまざまなシンボルとなった。羊は、食糧として、衣服として人間にさまざまな形で役立ってきた。野性と飼育という分離がこの物語に影響を及ぼしている。かりに、農耕に従事していた集団がいたとする。そこへ羊の群を連れた別の集団がやってきたとする。当然、この狼と子羊と同じような関係が出来（しゅったい）するかもしれない。

人間を動物にたとえて理解する傾向が一方にあり、他方に植物にたとえて理解する傾向がある。これらに野生と飼育の双方を加えてみるとどうなるだろうか。

羊の群は、番犬と羊飼いによって集団的に統御されている。狼は調教の利かない、不気味な森にひそみ、人間の家のまわりを徘徊する。

異教徒、見ず知らずの者、野盗の群、あるいは軍隊これらが「狼」のイメージと結びついていき、「羊」の方は、キリスト教徒や定住生活者のイメージに近寄っていく。子どもはこれらの境界に位置づけられる不安定な存在と見なされる。放っておけば、野獣化し、雑草のようになってしまう。これを「調教」し、「栽培」していくには、笞でビシビシ鍛えるやり方もある。手をかけ、目をかけて芽が出て花が咲かせるのを傍で待機するスタイルもある。

子どもの隠喩体系

子どもはこのような隠喩のなかでようやく姿をあらわす。当初はまことに断片的であった。ガツガツ食べているだけであると見なされると「餓鬼」と呼ばれる。この音とこのイメージ（地獄につながるイメージだ）の歴史も長い。

一家の食糧が限られているところから「穀つぶし」とも称せられた。

「口減らし」のために奉公にやられる。

「波風荒きこの世間」に生きていくにはまことに容易なことではなかった。

『狼と子羊』の物語は、ことによると、このような一連のタームとともに解釈し直されるのではないか。「飢鬼」「穀つぶし」「口減らし」それに「世間」。

狼は、ナマの飢えのシンボルであった。いろいろ理由をつくり出す強者のシンボルでもあった。子羊は正論をのべたてたが、最後には娘に食べられてしまう。いったいどちらが子どもに近いのか。ここでも相対論が必要になる。つまり、子どもは狼に近づけて解釈されたり、小羊にひきつけて解釈されることも可能なのである。

「子宝」「嬰子（みどりご）」「産児」――その他、もろもろの表現がある。しかし、これらの子どもの一面をスナップ写真のように瞬間的にしかとらえていないのではなかろうか。

ハイスピード映写

歴史を足早に通り過ぎていくと、子どものイメージは古典的形式のもつ静的なものから動物なものの方に変わりつつあることがわかる。ただし、それなるが故に子どもの輪郭はたえず姿を変えつつあるということでもある。

充実と空虚の交替、明と暗、それらはつねにいっしょにあらわれ、私たちを驚かす。瑣末な論議をつき抜けて、子ども像は豊饒な風景を呈しはじめている。

ここに入る者はかならず驚異に目を見開かされ、いつのまにかさまざまな思想、世界、態度の交差する四辻に立ってあることになるだろう。子どもは、多様な角度から見ることのできる小宇宙をなしているが、その小宇宙はもはや一貫した決定論にしたがって動いてはいない。私たちがどのように、どちらの角度から、どのような距離で近づくかによって、別様に見えてくるのだから。

私たちは、子どもを認識するということに力をかけすぎてきた。力点の置き方を変えなければならない。『狼と子羊』に戻ってみると、あの短かい物語のプロットが意外にも緊張がしだいに盛りあがっていくドラマの典型をなしていることから、今日話題にされている〝いじめ〟の問題にもそれを通して光を当てることができるのである。理由のないときには理由もつくり出しうる立場にいる。〝いじめ〟の理由を外に求め、有力な原因を一つだけさぐろうとしても無駄であろう。

手がかりは、理由のないときにいかなる理由をでっちあげるか——それを当の強者が強さの証と思っているか、弱さの証と思っているか、そこまで見ていかなくてはならない。

それは隠喩体系を読み解くのに似ているだろう。

子どもの小宇宙はこうして二十世紀の知の体系の転換を両義的に上演しつつあるように思える。

（名古屋大学）

子どもたちのこと

6, 子どもらしさ

大橋　利恵子

四月、新入園の4才児を今年は一クラス三〇名ずつで迎えることができた。どんな子たちだろうと期待をもちながらの入園式、そして大さわぎの一週間が過ぎ、ゴールデンウィークになるころには、幼稚園に慣れて少しずつ園児らしくなってきている。そのころにはそろそろ、それぞれの子どもの子どもらしさが見えてくるようである。

H君は色白の笑顔がかわいい男の子である。二人兄弟の兄で家では祖母がおもりをしてくれ、何でも自分の思うようにしていたようである。そのH君が本領を発揮するのにたいして時間はいらなかった。まだみんなが絵を描いたり、ブロックで静かに遊んでいる時から、自分の目につく遊びに次々に飛びついていった。クレヨンもはさみもマジックもみんな出して、画用紙に描いたり切ったりしていたかと思うと、ブロック遊びの中にわりこんでいって友だちを押す。その子に押しかえされると今度は突きとばす。そして「ぼく　友だちきらい」とふくれっつらをしてみせる。やれやれと思いながら他の子にかまっているとH君がいない。もうさっさと戸外に遊びに行っている。そして、大抵、池か水道へまっしぐら。「もう帰らなくてはならないから、お部屋にもどってきて」と言っても知らん顔。しっかりひっぱってこなくてはやめられない。そん

な風だから、自分の物がどこにあろうがおかまいなし、くつ、上ぐつ、帽子、タオル、クレヨン等々、毎日二～三回は「H君、落し物」とおとどけしなくてはならない。それでも本人はごきげんで帰りには「先生、またくるね。」

H君本来の姿を出せているという点においてはこれでいいのかもしれない。子どもらしい子だなと思って、おもわずこちらも困っていたことを忘れてしまい「またきてね」とにっこりしたくなる。その天真らんまんさには本当に脱帽である。でも……がやはりつく。どうしても教師の目から見た時に、子どもらしくていいとだけは言っていられない。しかしこちらのわくを押しつけて、きちんとさせるのはあまりにもおしい気がするし、H君のよさがつぶされていってしまうようにも思う。

そういえば、一昨年の4才児にも同じように、自由奔放でいかにも子どもらしい子どものR君がいた。R君も遊ぶこと、特に気にいっている水遊び、積木遊びなどにはすごく集中して遊べるのだけれど、自分の身じたくをするとか、話をきちんときくとか言うことになると、ほとんどだめなタイプであった。そんな風だから、友だちとの遊びより、自分で好きに遊ぶほうがよかったようで、5才児後半まで、一人遊びが多かったようである。4才児入園後、一ヶ月ぐらいのころに、R君ができないことを教えると大変なので、できるようになったことを教えてあげようと心に決めた。そしてまた、R君のやりたいことは

時間や場所が許すかぎり保障していくことにし、かなりじっくりとR君につきあった覚えがある。それでどうなったかと言えば、集団生活のわくからはみ出てしまうことはないけれど、一人特異な存在だった。かといって遊びの面でR君にこれをやらせたら他の誰よりも、というほど打ちこんでいるわけでもなく、何か中途半端なままだったような気がする。

無論、H君とR君は違っているし、保育に「タイプ別の手だて集」というのがあってはならないと思っている。でも、H君に対して自分がどのように接していけばよいのか、目下暗中模索であり、反面、H君がどのように伸びていくのか楽しみでもある。子どもらしい子どもが少なくなったと言われる今日このごろ、あのH君のエネルギーを大切にしたい。でも生活のルールは守ってほしい。ただ形を教えるのではなくて、本人がくつをしまっておかないとくつがなくなって困ると思って、しまうようになるまでじっくりつきあっていきたいと思ってはいるのだが……。

（岐阜市立北幼稚園）

教育実習ノート

Yさんから K先生へ

○月○日（木）くもりのち雨　みどり組

。お誕生のお友達の仲間に入って、しげちゃんも始終にこにことして嬉しそうだ。紹介が終ると、走って外へ出て行った。いよいよ音楽劇の「仲よし蝶」なので、外に誘いに行った。「太陽になる？」と聞くと、ついてきたので、お面をかぶせ舞台に立たせた。花や蝶が舞い、二人の太陽が、両手をキラキラとさせて音楽に合わせて出てきたが、しげちゃんは両手を前に組み、じっと立っている。先程の笑顔はそこにない。「やらないと先生困るのかな」と、やさしいしげちゃんは私に応じてくれたのだろうか。きつく組んだ両手がそれを語っているようだった。

午后から、しげちゃんと、ぶらんこのところへ行くと、ひでみちゃんが泣いていた。「どうしたの？」と聞いて、鉄柵に腰をおろしていると、しげちゃんが……を何回も繰り返した。それからは、こぎながらずーっと口ずさんでいた。

K先生からYさんへ

○お誕生会も、いつもあのような形でいいのだろうか、と悩みます。スープとサンドイッチで、お誕生日の母子がマナーも心がけて、先生と一緒に会食でもできるといいのですが……。先生方がやった「赤ずきんちゃん」静かに見ていましたね。表現の上手・下手より、やはり真剣にやっている表情でしょうか、「先生方のチームワークのよさが、自ずから子どもの心を育てる」と、会のあとの懇談会で、お母様の一人が園長に話されたそうです。

「仲良し蝶」やるから先生ピアノ弾いて、とよくせがまれます。楽譜をガサガサめくるのでは雰囲気がこわれてしまいます。せりふも人気があるので、テープに入れるわけもいきませんし、できれば、電気を通さない音をきかせたいし、幼稚園はすべて、暗譜でなければ通用しない世界です。子どもの動きを見ながら弾きたいと思います。

しげちゃんは、声をかけても、誘わないでよかったように思います。何でもがまんしてしまったら、なんの為に保育していたかわかりません。やはり「したくない」という自分が出せる場が必要でしょう。

Yさんから K先生へ

○月○日（木）　みどり組

○雨の晴れ間に、ためらいながらぶらんこをかけるが、乗りたい子ども達が、「ワーッ」と集る。四つのぶらんこの一つで取り合いが始まる。最初のうちは見ているが、なかなか

子ども同志では解決することができないようなので、「ほら、こんなに乗りたいお友達が待っているでしょう。数をかぞえて順番にしましょう」と言うと、上手に交替ができた。年少さんばかりが集まっていたこともあって、しげちゃんが、きょうはとても面倒見がよいのが目につく。順番というと、自分から列の前に並んだり、お友達の回数も数えてあげたり、お兄さんぶりを発揮していた。

お弁当のとき、しげちゃんが、私の卵焼きが欲しいというのであげると、たえこちゃんが、「Y先生のなくなっちゃうわよ」と言う。「大丈夫よ」というと、私のお茶が減っているのを見てつぎたしてくれる。今度は、横で見ていたみちひさちゃんが、ついでくれる。それを見ていたしげちゃんも、「ぼくも入れてあげる」と、なみなみとついでくれた。おかげでお腹もいっぱいになった。

帰り道で突然「先生」と子どもの声、「どこの先生かな?」とふと見ると、ゆうこちゃんが勢いよく走ってくる。私のことだと思ったのはその時だった。週に一日でも、自分の勉強の為にきているのに、子ども達から見れば先生なのだ。道で屈託なく声をかけてくれたゆう子ちゃん。私に今の立場を自覚させ、「これからこの道を進んでいこう」と、決めた私を元気づけてくれた子ども達に感謝しよう。

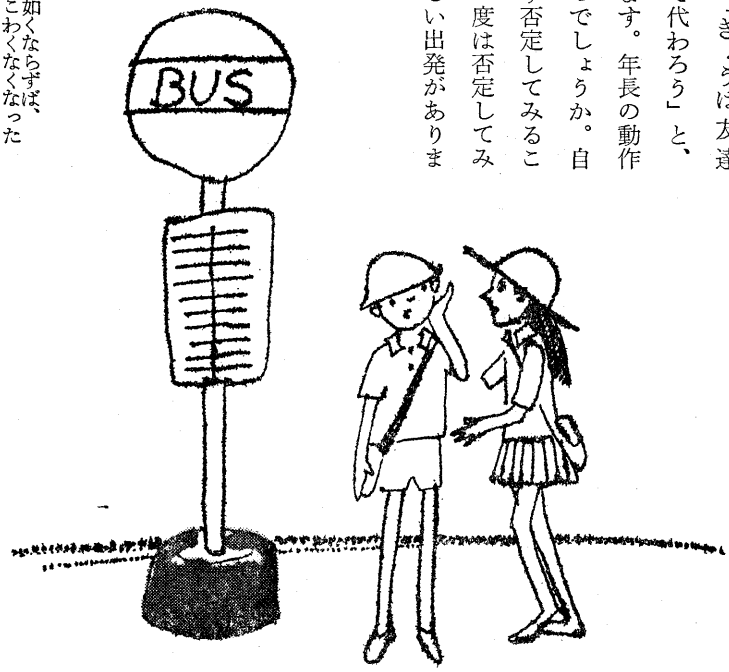
K先生からYさんへ

○まだ五月なので、ぶらんこも数えてあげたりしますが、「二十乗ったらかわるのよ」と

言う言葉はどうでしょうか、「きょうは友達が待っているからこのへんで代わろう」と、子どもは自分の意志で降ります。年長の動作が、年少を引っぱっていくのでしょうか。自分の「言葉」一つにも、先ず否定してみることです。自分の行為でも、一度は否定してみることです。そこから又新しい出発があります。

五月号五〇頁
六月号五三頁
に訂正します。

如くならむば→如くならずば、
こわくなった→こわくなくなった



はるにれの会

若いお母さんたちへ

——いい気分・幸せな気分——

宮里暁美

うちの息子は現在一才三ヶ月。ワンワンが大好きで、犬でも猫でも象でも、みんなワンワンと呼びかけます。家中の引き出しは全て開けようとし、家の中は、ある時はタオルが散乱し、又ある時はくつ下が……といった具合の大騒ぎがくり返されています。さらには、あらゆるでっぱりに足をかけ、なんとしてでも手を伸ばし、よじ登れる所ならどこでも登ってみようとします。大人用のイス、鏡台、押し入れが、こうして征服されていきました。今日も散歩をしていると、道の横に広い溝のようなものがあり、息子はそこが何となく気になるようで、じーっとみていました。そして何回か行ったり来たりし、私の方を見たりし、そのうちペタンと坐り込みました。そして、後向きにそーっと足をおろしてみました。けれども、足は下につきません。あれっという顔でもう少し伸ばしてみたけれど、やっぱり足はつきません。そんなことを何回かくり返し、ダメだな、とあきらめたのか、立ちあがってまた歩き出しました。いつか思い切って手を離してみるか、或いは何かの拍子に手を離すかして下

におりる方法を学ぶのでしょうか……。ちいさいながらも、この意志の強さ、好奇心の強さには驚かされると共に、人間ってたいしたもんだなーという安心感を持つことの多い毎日です。

それにしても子育てというものは、なかなかに煩雑で、特に私が一年間の育児休業を終え職場復帰してからは、時間に追われ、心ここにあらず、というような状態さえありました。早く夕食を食べさせて、とにかくお風呂に入れ、すぐ寝ればいいのだけれど……といった何かに追い立てられてでもいるような気持ちでした。寝る時になってぐずりだすと、少し泣けば疲れて寝るんじゃないか、とそのままにしておいたりしました。でも結局は泣きっぱなしで「もう、早く寝なさい！」と言ってもわからぬ子に怒ってしまったりすることもありました。息子は親の気持を察してか、見幕におそれいってか、「うっうっ」と声を殺したり泣いたりし、そんな様子にハッと我に帰り、「ごめんね、ごめんね」とあやまったり、悪戦苦闘の日々でした。

そんなある日のこと、私は、あるお母さんの子育ての記録を通勤途中の電車の中で読みました。そのお母さんは、びっくりするほどに子どものこと（子どもの動き・子どもの気持ち）を大切にしていました。家事をする親のまわりで何かとやってみたがる子に、やりたいことをできるやり方でやらせてあげたり、「困る、ダメ」と言ってしまわずに、それではこうしたら、と考えることで、こんなにも親子の世界がひろがるのかと感心させられたのです。

「よし、今日は、ひとつ我が子にゆっくりつきあって夜を過ごしてみよう」と、私は家路に着きました。なんとなくのんびり夕食を食べ、夕食がすんだら、さあ片づけ…とあせるのをちょとやめてみたのです。

おなかが一杯になった息子はいい気分でさっそくおもちゃ箱のところへ行きます。ヨイショヨイショとひっぱり出し、中をかき回し気に入ったものを捜している様子。そばでニコニコしている私に、みつけ出した積木を「あい」と渡してくれます。棒をみつけ、それを穴にさ

し込もうとし、さし込めるとニカッと笑って私の方を見ます。そして又、別のものをとり出したり、とゆったりと遊んでいます。そろそろ寝る時間になったので、「けいちゃん」と呼びかけると、息子はニカッと笑って私の背にべたっともたれかかってきました。「一緒にねんねしようね」と、そのままおんぶして、ふとんの中に突入。ふとんの中で棒と空箱でウーウー言って遊び、ちぎっては母の口に入れようとして笑ったり、そしてコトン、と寝ついてしまいました。

その日のことを、保育園の連絡ノートに記しながら思いました。一日24時間、どう過ごしても動かしようのない数字のように思えるけれど、その時の気持ちの持ち方で、ふくらみもするし、この子の〝今〟と共に過ごせる時間を大切にしよう。30分、一時間は、他のことを忘れ、息子と同じ空気を吸い、息子と同じリズムで過ごそう、と心にちかったのです。

そうして毎日を過ごしていると、いろいろな発見がありました。

我が家には、父親がダンボールを切ったりはったりして作った小さなすべり台があり、息子はそれがとても気に入っていて、よじ登ったりすべったり、物をころがしたりしてよく遊んでいました。

ある日のこと、トントントンという音が聞こえます。何かしら、と思ってみると、息子がそのすべり台のてんぺんに坐って足をブラブラさせ、トントンと音を出しているのです。とてもいい気分なのでしょう。トン、トン、トン、というリズムが心地よく流れ、ニコニコ笑っていました。そういえば、まだずっと小さいころにも、うつぶせで寝、上体を起こし、足をパタンパタンとさせていたことがありました。そばで私が真似て足をパタンパタンとさせると、それを見て笑うほどに好きな動作でした。

いろいろな時にいろいろな場所で足をパタンパタンとさせて笑っていた息子を思い出した時、そしてそれが目の前で足をトントンさせて笑っている息子の姿とだぶり、ああこういうのって、いい気分っていうかんじなん

だな、と思いました。

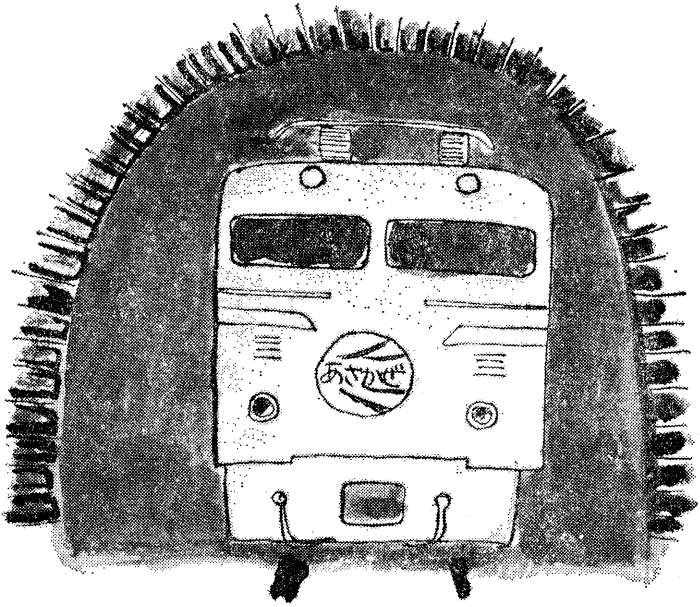
「立てるようになった」「おさじが使えるようになった」というような成長は、容易にとらえることができ、又親の方も心待ちにしていたりします。だからとても印象に残り、人にも話したり、ほめたりします。

けれども、「足パタンパタンが、とてもいい気分なんだね」ということ、そういう気持ちを息子が感じているということに気づき共感するには、親の方に心の余裕がないとできないのではないでしょうか。

息子と二人並んで寝そべり、パタンパタンと足をならす。いかにもうれしそうに顔を見合わせて笑う。そんなひとときが一日の中に10分でもあると、一日が急にあたたかいものに感じられてくるのです。

思えば、こうして心を通わせ合え、無条件の信頼を寄せてくれる我が子という存在は、親を幾重にも励まし、育ててくれるのですね。

息子の保育園の話を少ししましょう。



息子は公立保育園に入るまでの3ヶ月間、未認可保育園に通いました。そこは、我が家からバスと電車を乗りついで40分もかかるところにあり、寒い冬の通園、そして一年間母親と過した甘えん坊の息子、どうなることか、と心配でしたが、手づくりのあたたかさが感じられる保育園で、今、そこでの日々をふり返ると涙が出るほどになつかしくなるのです。

ある時、園長先生がこんな話をしてくれました。

「一才になったばかりの子たちでも、誰かが泣いていると、どうしたの、と寄ってきて、はいはいの子は、はいはいで寄ってきて、保母と一緒に、泣いている子をさすったり、これ使いなよ、とでも言うようにおもちゃを持ってきたりするんですよ。」

私は、その話をきき、子どもがこんなことをしたということも素敵だけれど、それ以上に「ああ、子どもっていいな、心の中に大切ないいものを持っているな」と信じ、愛してくれる保育者集団であるということがすばらしいことではないか、と思いました。

はじめのうちは泣いてばかりいた息子ですが、一ヶ月程通ったころには、迎えに行くとおもちゃで遊んでいる姿がみられるようになり、二ヶ月程たったころには、迎えにきた私をみても、にっこり笑って遊びつづけるようになりました。「ここは、自分の場所だ」とすっかり思えるようになったのでしょう。

転園も真近になった3月の中ごろ、保育ノートには次のように書いてありました。

『今日は、3月になって初めてと思えるほど春らしい日で、みんなで車の少ない所を選んで散歩に出ました。乳母車からおろすと、けいごちゃん（息子）も一人前にトコトコトコと歩き、よろっとよろけて一回おすわり、又気をとり直して、歩いて、又すわってと何回もたったりすわったりをくり返しています。細い路地にはいと、ひかるちゃんと一緒にブロックべいのかげにかくれてなかなか出てこないのでじっと待っていると、2人でそろり顔を出してきて思わずニッコリ。「けいごくん、しっかりあんよ」と声をかけると、トコトコ歩いて、その歩い

ているのにはずみがついて、まるで踊っているようなけいごくんです。』

まるでよくできたテストを返された時のように、私はいつもうきうきして保育ノートを読みました。保育ノートはきまって息子に最高点をつけていてくれました。おりこうさんにしていたというのではなく、いたずらをしたりけんかをしたりしながらも愛に包まれ、息子がそこで幸せな時を過ごしたということがよく伝わり、それは親にとって何よりの幸せでした。ですので、帰りのバスの中で、家に着くのが待ちきれず、息子をひざにのせ、読んでみるのが日課でした。

ある日のこと、私の前に坐った親子も、カバンからノートを取り出しました。「ああ、家と同じように保育園帰りなのかな、どの親もやっぱり早く読みたくなるんだな」と面白いような気持ちでみていると楽しそうな声がきこえてきました。

「今日Aちゃん保育園で何して遊んだのかな。読んでみようね。」

「うん、声に出して読んでね。」

「いいわよ。えーっと、Aちゃんは今日、砂場で物の取り合いをして、Bちゃんをたたいてしまいました。そして怒ってずーっと庭のまん中に立ったままでいました。」

(はじめははずんでいたお母さんの声がだんだん小さくなりました。)

「素直にごめんなさいができるといいですね。」とお母さんは読み、しばらく考えています。

「Aちゃん、そんなことがあったの？　そういう時、ごめんねって言うのよ。」そう言って、気分をとり直し読み進めました。すると今度は「給食が食べるのがおそくて、最後になってしまいました。」という文面で、またまたお母さんは考え込んでしまいました。私はうしろで様子が手にとるようにわかり、このお母さんはどうするだろう、あんなに楽しみにノートを開いたのに、お小言ばかりで、もう子どもを叱ってしまうのかしら、と思ったりしました。すると、しばらくそのお母さんは笑って「そう、Aちゃん食べるの遅いの。いつも家で、お父さ

んもお母さんもゆっくりごはん食べてるからかしらね。」と言い、ノートをしまったのです。そして2人は又楽しそうにおしゃべりをし、次のバス停で降りて行きました。

気持が沈んでしまいそうだったのに気をとり直し笑顔で帰路についていったお母さん。とてもあたたかいお母さんでした。保育者という職業についている自分への自戒もこめながら、私はこの素敵なお母さんの姿を胸にきざみました。

その時私は思い出しました。ずっと以前に同じような場面に出くわしたことがあるのです。しゃ断機の降りた踏切のところで、怒ったお母さんが子どもに話していました。やはり保育園帰りの2人だったのですが、お母さんはプンプンに怒っていました。

「どうしてあんたは、棒で人をぶったりするの？」

「ぶってない」

「ぶってないということないでしょう。お母さんが迎えに行くと、いつも誰かが泣いていて、先生に言われるのよ。そんなに、人をぶったりする子なら、もう保育園には行けないのよ。明日から行くのやめるの？　行かないの？」

お母さんは、手をギュッとにぎり、せきたてるように言います。行かないの？　と言われても、行かないでいられるはずもないのです。

「行くよ、行くよ」と泣きながら言う子。

「だったら、人をたたかないのよ」と言う母。私は、2人をうしろからみていて、2人がそれぞれにかわいそうでなりませんでした。どうにもならない泥沼に、2人して入りこんで、いったい誰が救ってくれるのか、と思ったものです。

2組のおかれていた状況は似ていたと思います。けれども、その後ろ姿はとてもちがっていました。こんなことは、子どもとの生活の中では日常茶飯事のできごとでしょう。けれどもその中に大事なことが隠れているような気がしました。子どもと共にいる〃時〃を大切にする、ということは、決して、何でも叱らずに甘やかすと

いうことではないけれども、まずその子の今をうけとめていく。その上で一緒に幸せな明日を創るとしたら、親としての自分には何ができるのか、と考え行動する、ということではないでしょうか。〝幸せな気分〟というものは、自然にわいてくるだけでなく、いろいろなことを幸せに考えようとしてみることによって、次第についてまわるようになるのではないでしょうか。親が幸せな気分に包まれることによって、子どもも幸せな気分になる。そして何か、いいこと、楽しいことをやってみたくなる。そんなうきうきした親子がふえていったら素敵だな、と思うのです。

ずいぶん長いおしゃべりをしました。母親になって、まだ一年三ヶ月。母親になったとたん私は変わる!? と想像していましたが（なんと馬鹿げた想像でしょう）私は私のまま。母親としての自分、というのは、少しずつ子どもとつき合う中で育ってくるものなのでしょうね。

仕事に行きづまり保育園からの帰り道、息子を抱きながらしょんぼりとアパートの階段を登っていると、息子が私の肩をトントントン、トントントン、とたたきます。軽く軽くやさしくたたくのです。まるで「元気だしなよ、お母さん」と言ってくれたようで、思わず涙がこぼれました。

どうやら我が家では、今のところ、もっぱら息子が幸せな気分をたくさんたくさん送りこんでいてくれているようです。

子どもの頃、夏休みになるとすぐ、父の郷里の伊豆に帰った。夏休みの間だけ滞在する私には、ひとりとして友達がいなかった。土地の子と遊ぶのを、なぜか祖母が嫌ったためだ。夏休みの始まる前から、海で泳ぐ土地の子の肌は、黒く日焼し、陽に照らされて輝いてまぶしかった。それにひきかえ、私の肌は、白く、また、一日の大半を家の中ですごしていたため、二週間たっても、一向に色に変化は現われなかった。

私は、よくひとり家の大きな門の前に立ち、通りすぎる人々を見ていた。

「誉子ちゃん、いつ帰って来たの。いつまでいるの。おじいちゃん、おばあちゃん嬉しがってるでしょうね。」

私のことを知っている土地の人は、決まって同じことをたずねた。私は、いつも同じ答えをしては、きちんとおじぎをして、くるんと背を向け、家の方へと、歩いて行った。門から家の玄関までは、ちょっと距離があって、たいていの人は私が玄関にたどり着くまでに、姿を消していた。玄関の所で、門の方を見て、その人が行きすぎていたなら、私は、走って門の所にもどり、また次の人が声をかけてくれるまで待った。もし、まだその人が、私を見ている時は、しかたなく、玄関の戸を開けて、中まではいらなくてはならなかった。

一日に、何度もそれをくり返した。しかし、誰ひとりとして、『遊びにいらっしゃい』とはいってくれなかった。

まっ黒に日焼した子が、二〜三人走って来た。私の前をすぎる時、ちょっと足を止め、みんなでコソコソ話をして、また勢いよく走って行った。夏休みが終わる頃、門の前で長時間立っていたためか顔と手は、土地の子と同じように黒くなった。でも、その夏も友達はできなかった。

（誉）

幼児の教育　第八十四巻　第八号
八月号　©　定価三五〇円
昭和六十年七月二十五日　印刷
昭和六十年八月一日　発行
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行人　本田和子
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会
東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社
東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京九—一九六四〇番
⊙本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

※万一製造不良の点がございましたら，おとりかえいたします。

すぐ遊べるゲーム

〈全6巻〉有木昭久・著

①3・4歳児
（4・5・6・7月）
②3・4歳児
（8・9・10・11月）
③3・4歳児
（12・1・2・3月）

④5歳児
（4・5・6・7月）
⑤5歳児
（8・9・10・11月）
⑥5歳児
（12・1・2・3月）

●あなたも遊びの名人になれます。
●すぐ遊べるゲームの名ガイドブック。

どのページを開いても、遊びがたのしいイラストで、わかりやすく紹介されています。遊びの基本型と応用の展開例があげてあり、子どもの状態に応じた指導の参考になります。子どもの好きな遊びが年齢別に選べるようになっているので、使いやすくなっています。3・4歳児の友だちづくりから、5歳児のダイナミックな遊びまで種類が豊富です。

B5判・各200頁・定価各1,800円・3巻セットケース入り・セット定価各5,400円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館

子どもの心と明日を考え、真の教育をみつけるために……

☆幼稚園・保育園にフレーベル館が独占販売！

おすすめします！

教育新聞

これからの園経営は、正確な情報の把握が必要です。
「教育新聞」は、我が国で最も信頼されている教育総合専門紙です。

- 「教育新聞」は、週２回（月・木）発行です。
- 購読料――月額 1,800円

各紙面構成

第1面
行・財政ニュース
コラム（円卓）
鉄筆

第2面
論壇・主張
解説と論評　資料室

第3面
実践リポート（園・学校経営）
学校経営入門講座（連載）
教材・教育機器の紹介

第4面
書評・新刊書紹介
文化・学芸

《保存用資料集と特集号》
毎月6～8ページ建てで幼稚園・保育園の特集記事を収録
随時保存用の資料版も

お申し込みは、フレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所にご連絡ください。

株式会社　教育新聞社